

アトラスⅡ

継ぐ者たちの時代―

創世の物語―

正道

目次

第2章 継ぐ者たちの時代

(1)	鳥の人	3
(2)	オロンゴ岬	9
(3)	失格者	18
(4)	勝利者	27
(5)	水と米と粥	33

第3章 創世の物語

(1)	日暮れの浜辺	42
(2)	キンナラという老婆	49
(3)	デルフィー	56
(4)	オンパロス	63
(5)	月神セレネの仁慈	72

第2章 継ぐ者たちの時代

（1）鳥の人

六年が過ぎました。

そして島の巫女が亡くなってから半年が過ぎていました。

もちろん巫女といっても、セフィーネの事ではありません。六年前セフィーネが亡くなったために、巫女の仕事を代行せざるを得なくなった女性の事です。つまりバツティーヤの妻であり、セフィーネの母であった女性が亡くなり、それから半年が過ぎていたのです。

彼女の死は、そのままピト・テアナにおける巫女の不在を意味していました。当然のことながら、島人たちは新しい巫女を必要とし、新たな巫女が襲名される日がくることを切望していました。

その新たな巫女となるのが誰なのか、それは言うまでもありません。

六年前には単なる幼児に過ぎなかったチェリアも、今ではもう十四歳の娘となっており、亡き祖母の訓育によって、島の指導者たらんとする教養にも不足はありませんでした。とうとう彼女が島の巫女となる日が到来したのです。

img016.jpg



島の巫女が襲名される日は、また島の勇者が襲名される日でもあります。

この二つの役割は不可分のものであり、島の勇者を任命してこそ、巫女も、その巫女としての活動を許されます。表向きは、巫女が島の統治者としての肩書を担っていますが、実質は、あくまで勇者あつての巫女であり、巫女あつての勇者でした。

勇者の座に就くことは、島の男性諸氏にとって大変に名誉なことでした。

その座にあることは、そのまま島でもっとも優れた男であることを意味していたからです。

また、巫女が成年にいたれば、自動的に彼女と夫婦になることが定められていたので、巫女が、最近とみに美しくなつたと評判のチェリアであつては、これまでの平均をはるかに超える数十人の男たちが、「我こそ島の勇者とならん！」

と勇ましげに名乗りを上げたのも、およそ無理なかつたのかもしれませんが。

勇者となれるのは、むろんその中の一人でしかありませんが、勇者たらんと立候補した男たちは、まず海上において船の操舵技術を試験されます。島の生活のなかで船を操る技術はかなり重要視されており、この分野での審査に合格した者たちだけが、勇者選抜の本戦である「タンガナ」に参加することが出来るのです。

操舵技術の試験はすでに行われ、明日はいよいよタンガナの本番です。

タンガナとは直訳で「鳥の人」という意味ですが、その実際の内容は、なぜか遠泳でした。泳ぐのに鳥ですから確かに妙かもしれません。

十名の選手がこれに参加することになりますが、彼らはタンガナの前日を、その開催場所となる浜辺で過ごしていました。みんな一緒にです。つまりタンガナの競技説明のために一か所に集められていたのです。

その説明をするのはバツティーヤですが、説明をされる側、すなわち十名まで絞られた勇者候補のなかには、勿論われらがアサジの姿もありました。ちょうど十七歳の誕生日を迎えたばかりの彼でしたが、めでたく予選を通過することができたのです。

（とうとう、ここまで来たか）

彼はこのタンガナのためだけに、六年という歳月を費やしてきたと言つてよく、勇者に選ばれるべくバツティーヤに鍛えられた体は、今や、隅々にいたるまで鋼のような筋肉に覆われていました。そして、引きしまった顎の線、つり上がった眉、まさに若武者の風貌と言えましょう。

さて、十人とはいえ、数が集まると、やはり自然に、目立つ者というのは現れてくるものです。

そのうちの一人は、選手のなかの最年長にあたる者で、その名をカラマと言いました。おそらくは三十歳を過ぎているでしょう。

体は鍛えられているものの小柄で、その表情からは、およそ勇者たらんとする迫力は感じられません。どちらかというと文化人のような印象を与える人物でした。

もちろんアサジも目立っています。

まず見た目として体が大きいこと、そして、勇者バッティーヤと生活を共にしてきたという経歴のためです。

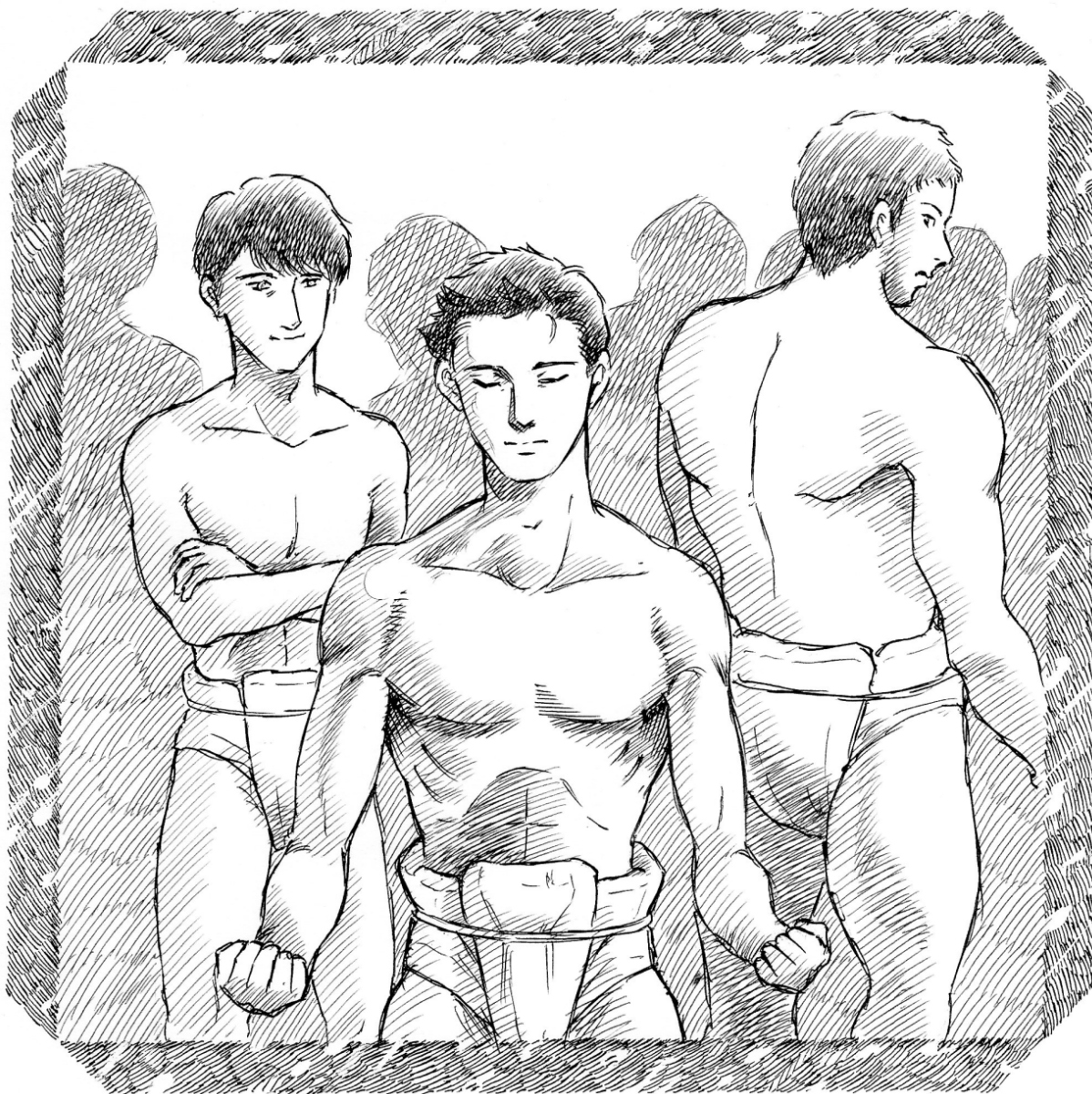
彼に話しかける者は多く、威圧せんと息巻く者はさらに多くおりました。が、それによってアサジが冷静さを失うことはなく、彼はただ自分自身との賭けだけを見つめていました。

つまり「勝てば勇者、負ければ死」ということです。なにしろバッティーヤから「負けたら殺す」と宣言されているのですから。

つねづね自分の生死について考えている者が、他人の挑発を馬耳東風に聞き流すなど、実にたやすいことでしょう。

ところで、一見して目立つほどですから、アサジは若者の中でもとりわけ体が大きいほうでした。ですが、そんなアサジですら影を薄くするような、それほどにも大きな体をした者が一人ありました。

img017.jpg



その若者の名はイド。実はまだ十三歳の少年でした。

タンガナの参加資格は十五歳以上の男子にしか与えられませんが、彼は、その大きくて立派な体によって、特例によるタンガナの参加資格を手に入れたのです。

彼の巨体はそれほどのものでした。それほどのものであったからこそ、タンガナを開催するにあたって組織される委員会が、次のようなことを言ったのです。

「彼の体力を埋もれされるのは惜しい。イドはまだ十三歳だし、決まりは決まりだが、はたして、あの子の巨体を無視してよいものか。精神面の幼さを補って余りある、あの立派な体は、守られる巫女のためにもなるのではないか」

そして、その委員会からの恩恵に応えるように、船の操舵技術におけるイドの成績は、ほかの候補者を大きく引き離れた最優秀のものでした。

ちなみに、この操舵試験におけるアサジの成績は、手先の不器用さがたたって、あわや選もれか、というほどお粗末なものでした。

さて、そのイドですが、彼は勇者候補たちが集まった中で、ちょっとした問題児になりつつありました。イドは、自分よりも年上でありながら、巨大で遅い自分の体と比較すると、いかにも貧弱そうに見える周りの者たちを、

「はん、こんな奴らなんて」と低く見がちであり、そうしたさげすみが、彼の言動や仕草の中に、何とも嫌味なものを滲みださせていたのです。

こうなると、イドに対して周りが距離を取るようになって当然ですし、実際のところ、まさしくそうなっていました。勇者候補たちの誰もが、彼にだけは近づきたがらなかったのです。

ただし、そんなイドに対して、周囲の冷たい視線とは違って、どこか彼を憐れむような、そうした特別な眼差しを与える者がいました。最年長の選手であるカラマです。

しかし、その眼差しの意味を知る者は誰一人としてなく、イド自身も、そのようなカラマの視線には全く気づいていませんでした。

こうしたカラマの視線でしたが、彼の視線がアサジに向けられる時には、どういうわけか、それが急に親しく快活なものとなり、話しかける言葉にも、どこか好意的な気持ちが表れているように思われました。

夜を迎えて、カラマがアサジに今日最後の言葉をかけます。

「アサジくん、君は実にいい目をしているよ。君が勝ってくれば、勇者の座は、ちゃんと実のあるものになるだろう。まもなく今日も終わる。明日、どうか頑張ってくれたまえ」

アサジは、倍ほども年齢の離れたカラマの言葉に戸惑ってしまいます。

「何を言っているんですか。明日、私とあなたは敵同士となって戦うんですよ。それなのに私を応援してどうするんですか。意味が分かりません。それとも、今のうちにいい顔を見せておいて、明日、私に手を抜かせようというのですか」

「なに？ よく言うね。君が手抜きなんかするものか。どんなことがあろうとも、絶対に勝利を掴まんとする、そういう不撓不屈の面構えをしているくせに。そんな君が手を抜くとはいいい冗談だ。ははは、

君は想像していたよりも面白い男みたいだな。じゃあ、明日、がんばれよ」

「がんばれよって……それはがんばりますよ」

そう答えるアサジの顔は困惑に満たされていましたが、立ち去るカラマの顔は、逆にいたずらっぽく微笑んでいます。まったく奇妙な対照でしたが、アサジが疑問を深める間もなく、ついに就寝時間をつたえる鐘がならされました。

（2）オロンゴ岬

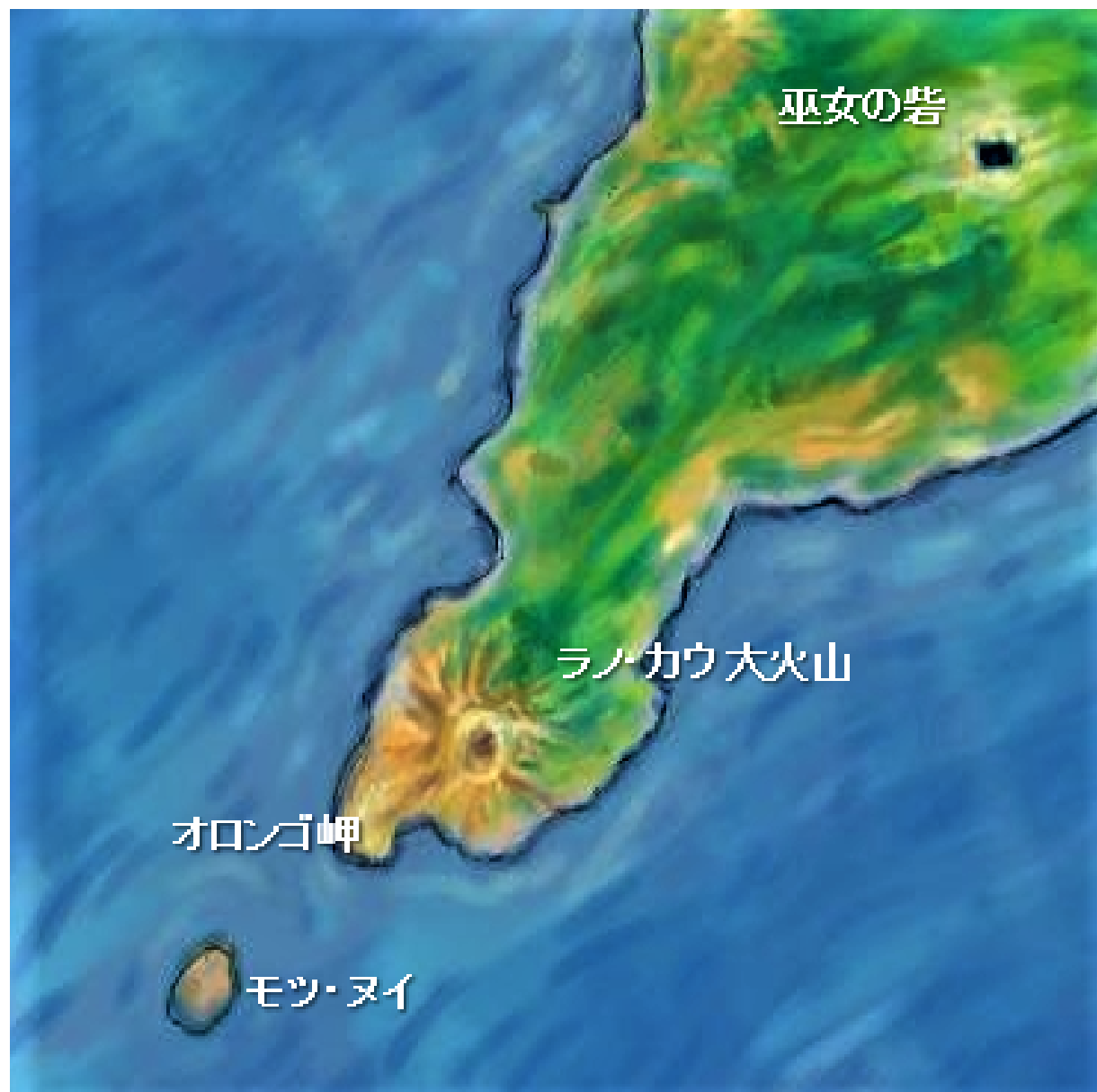
朝を迎え、とうとうタンガナが行われる当日となりました。

勇者候補である選手たちに軽い昼食が配られ、これを詰め込んだ腹がほどよくこなれた頃、いよいよ十人の若者たちが浜辺に立ち並びました。夏の太陽がジリジリと選手たちの体を照りつけます。

テピト・テアナの南端に位置するこの浜辺は、島の人々から「オロンゴ岬」と呼ばれている場所であり、実は、あのラノ・カウ大火山のそばの海岸線でもありました。

覚えておいででしょうか。六年前、セフィーネとコースタニヤが船出したのが、まさに、この海岸線だったのです。ですから、近くにはあの時の船着場もありました。

2023.04.15 / (2) .png



（セフィーネさま、コースタニヤさま……あなた方のためにも、私は今日勝って勇者とならなければなりません）

いまや逞しい青年となったアサジが、心のなかでそう呟きました。

やがて老勇者バッティーヤが選手たちの前に現れました。彼も歳をとり、筋肉もかなりそげ落ちてしまいましたが、まだまだ威厳ばかりは失っておりません。そんなバッティーヤが、高らかにタンガナの競技開始を宣言しました。

「精鋭たちよ、お前たちは、これからこの岬を出発し、遠泳によって彼方にある小島『モツ・ヌイ』を目指すことになる。モツ・ヌイに上陸した者は、そこで海燕の卵を手にいれ、それを割らぬようにしてこの岬に持ちかえるのじゃ。みな恐れずに進むがよい。さあ、準備はよいか」

A black and white woodcut illustration of a man standing on a rocky shore, looking out at a large, winding river or stream that flows through a landscape of hills and fields. The man is wearing a long, light-colored robe and a dark belt. The river is filled with many small, dark, rounded objects, possibly stones or debris. The sky is cloudy, and the overall scene is framed by a decorative border.



ハイ、とは誰も申しません。息苦しい空気のなか、若者たちの面前で、ただバットイーヤの手が勢いよく振り下ろされました。

十名の選手たちは、歴代の勇者たちもそうしたように浜辺を駆け、一斉に海へと飛び込みました。まだ見ぬ小島モツ・ヌイ、島の産卵場という意味をもったモツ・ヌイを指す彼らは、襲いかかる大波をものともせず、どんどん浜から離れていきました。

選手たちの泳ぐ速度に差が出来はじめ、その差から、やむなく勇者の座を諦める者たちが頻出してきた頃、目指すべきモツ・ヌイが、若者たちの先頭を切って泳ぐ者の目に見えてきました。

その先頭を泳いでいる者というのは、他の選手にとっては何とも面目ないことですが、最年少選手としてタンガナに参加している巨漢イドでした。

イドは、自分以外の水しぶきの音が遠くからしか聞こえなくなったのに気づくと、

（はん、もう近くには誰もいないぞ。振り返っても仕方ない。このまま奴らを引き離してモツ・ヌイに上陸してやる）

と、まさにご満悦の表情を浮かべました。

ところで、このタンガナ、イドにとっては何としても勝ちたい勝負でした。

島の勇者という役職、これを手に入れようという名誉心もさることながら、イドが本心から手に入れたと思っていたのは、巫女チェリアその人であり、こちらは、より純粋な恋心が求めるものでありました。

思えば一年前です。そのころイドは初めてチェリアに会ったのでした。

島の農民、漁民には、その収穫の一割を巫女の砦に納める決まりがありました。たいがい農民は穀物を、漁民は干し魚を献上します。これらは、島における「もしもの時」に非常食として引き出されることになるのですが、それでも一部は砦に居住する人たち、つまり巫女たちの食料となっていました。

このため巫女は、恒例行事として、年に一度村々を回ることになっており、そこで民たちにお礼を申し述べていくのです。

ただし、今から一年前ごろにはすでに巫女の——バットイーヤの妻であり、セフィーネの母である人の——体調は思わしくなく、そのお礼参りには、巫女の代理としてチェリアが回っていたのです。

イドが最初にチェリアを目にしたのはこの時のことで、昔のアサジがセフィーネに対してそうであったように、まず、その無類の美しさに目を奪われました。少年イドの目に、一つ年上であるチェリアの美しすぎる姿は、ほとんど毒に近いものがあります。

芳しい毒氣にあてられたイドが惚けていると、その姿に気づいたチェリアが、

「大きな体をしてらっしゃるんですね。その体でしたら、お仕事は人の何倍も出来ることでしょう。どうか村や砦の私たちのためにも頑張ってくださいね」
そう言ってイドに頭を下げました。

img019.jpg



（こんなキレイな人が俺の頑張りを必要としてるのか）

そう思うとイドは胸が一杯になってしまい、結局何の返事もすることが出来ませんでした。

それからというものの、彼の脳裏からチェリアの姿が消えることは一切なく、しかも日を追うごとに、それは激しい恋慕へと変化していったのです。

「あの人は僕を必要としてるんだ。あの人には僕じゃなきゃダメなんだ。だから僕は……あの人を自分のものにするんだ」

子供心に、イドは何度そのように思ったか分かりません。

願いは、一年のときを経て、いまや現実のものになろうとしていました。

依然としてイドは競泳の先頭を守っており、このまま行けば、間違いなく勇者の座は、そして巫女はイドのものになるはずでした。モツ・ヌイまであと僅かであり、前に誰もいない海を泳ぐイドは、思わずニヤリとほくそ笑まずにはいられませんでした。

ですが、その緩んだ口元がそのまま固まってしまう瞬間が訪れます。モツ・ヌイの海岸線がはっきりと見えたとき、懸命に足を動かしていたイドの横で、さも何気ないことをしたかのように、彼が泳ぐのを追い越していく者があったのです。

（こいつ、いつのまに―！）

それこそ我らがアサジでした。イドは必死に追い抜こうとしましたが、どうしてもそれが出来ません。なぜならアサジには、まだ充分な体力が残っていたからです。

アサジは今までイドの真後ろを泳いでいました。そうすることで、イドの体を波の盾にすることが出来たのです。イドの荒々しい水しぶきは、そんなアサジの気配を見事に隠してしまっていました。

そして、波をまともに浴びていたイドと、そのイドを盾にしていたアサジの体力には、いまや歴然とした差がついていたのです。

焦るイドを尻目に、とうとうアサジは「イドの巨体をもってしても、追いつくのは絶対に無理」というところまで相手を引き離してしまいました。

（そんなはずはない。あんな奴が俺のチェリアさまと、ウソだ！　ウソだ！）

イドがそう思ったところで、今となっては後の祭りではありません。

しかし、イドに勝ちを諦めることは出来ず、その執念は、ついに勝利のためには手段を選ばないという決意を呼び起こしたのです。

（どんな事をしたって、あんな奴に巫女さまを渡すものか）

この季節におけるモツ・ヌイはまさに「鳥の産卵場」で、この岩だらけの島には、じつにさまざまな種類の鳥たちが、繁殖のために羽を休めていました。

中でも多いのが海燕で、今時分その卵が一つもないなどという事は絶対にありえません。選手が、モツ・ヌイまでの往復をなした証拠に海燕の卵が使われるのは、まさにこのためなのです。

その海燕が群生しているのは、島のほぼ中央あたりでした。そのためモツ・ヌイに上陸した選手は、そこまでの道のりを、たとえ無数の鳥の嘴が恐ろしかろうとも、甘んじて進まなければなりません。

しかし実は、この道のりは、勇者をめざす者が通るべき必須の関門でした。いえ、タンガナの核心は、まさにここにあるとすら言えるのです。なぜなら、この関門を通るに際しての心得は、すでに昨日のうちに、バッティーヤから選手へと伝えられていたからです。

昨日、バッティーヤは、まず前置きとしてこう言いました、

「若人たちよ、この晴れ上がった空を見上げよ」と。

こう言われた選手たちが空を眺めると、その青空のなかに一羽の海鳥の姿が認められました。バッティーヤが続けます。

「お前たちにも、この空が天と地の中間にあることは分かるじやろう。そして、その空を飛ぶ鳥たちが、天界と私たち人間の世界を、まさにその『飛ぶこと』で結びつけているということも。

ゆえにそれは、テピト・テアナという鳥名の『天界と地上界を結ぶへその緒』という意味を、その意味を保ちながら、異なった形で象徴しておるのだと言ってよい。つまり鳥たちは、形は違えども、天意を伝える巫女と同じ役割を担っておるということじゃ」

そして、タンガナ最大の核心について、バッティーヤは次のように語ったのです。

「空を舞う鳥たちの心は、巫女と同様にどこまでも高貴であり、彼らは、自分たちにとって敵と思われる者にしか攻撃しない。鳥たちのその高貴さと相容れない、卑しさという名の敵に対してしか攻撃しないのじゃ。

では、鳥たちに敵として見咎められる『卑しさ』とは何か。

それはまず、鳥の天翔ける翼をはぎとり、これを恥辱しようとする者を指す。すなわち、本来は尊敬すべき相手を、嫉妬心によって苦しめようとする者じゃ。

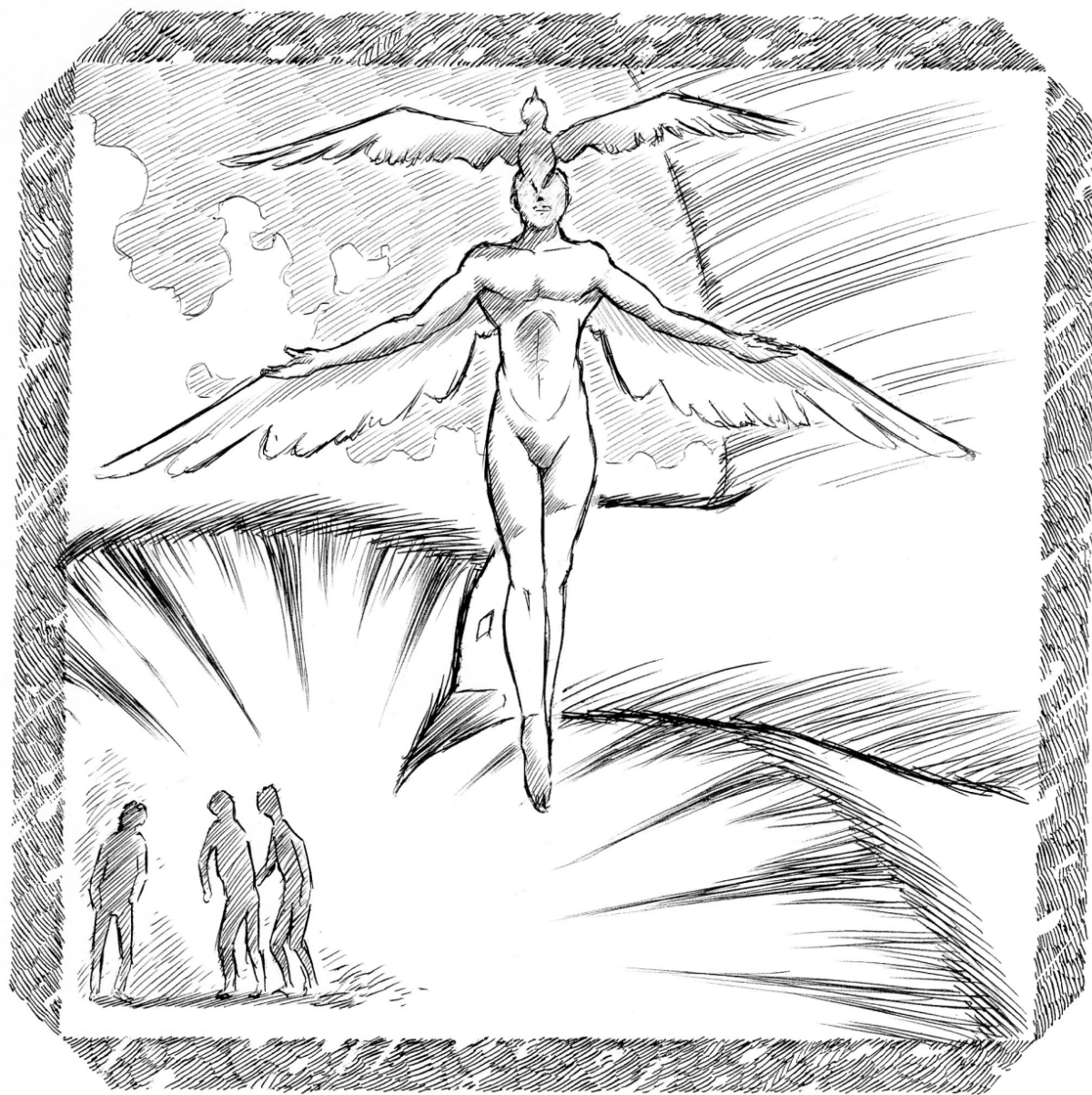
次に、大空に舞い上がれない者。すなわち、高所からの視点を持たず、大局を眺めるのに無能な者。

そして最後に、自分が鳥であることを忘れてしまった者。すなわち、自分の高貴さを忘れ、その低俗なものの考え方によって、自分はおろか、他人までも墮落させてしまう者。

卑しさとは、こうした者の心境をさすものだと言えるじゃろう。

だから、お前たちは卑しさを捨てて心を高めよ。そうしなければ、鳥たちが群がる道すがら、お前たちが彼らの攻撃に晒されないという保証はない」

img020.jpg



この競技がタンガナ（鳥の人）と呼ばれ、そのなかで勇者が決められるのは、このような思想的背景があるからなのでしょう。つまりタンガナによって、巫女（ヘソの緒）と同等の、勇者（鳥の人）が決められるということです。

モツ・ヌイに上陸したアサジは、海燕の卵を得ようとして、その巣があるという島の中央に進んでいました。周囲に目を向けると、数知れない海鳥たちが自分を見つめているのが感じられて不気味です。

（私は何のために卵を手に入れようとしているのか）

アサジは、そう自分の心に尋ね、静かにその答えが導かれるのを待ちました。

（私のせいで、チェリアさまはご両親という、彼女を守ってくれる最大のものを失ってしまった。そんなチェリアさまを守るためには、自分の命よりも彼女の命を大切に思う者が必要であり、バッティーヤさまは、その役を果たす者としてこの私を選びになった。

もう三年も前になるだろうか。私が落ち着きを取り戻したところ、バッティーヤさまは当時の心情を私に教えてくださった。あのとき、本当は私に償いを求めたのではなく、私を見込んでチェリアさまの夫に選んだのだと。ああでも言わなければ、私の自殺願望を断ち切ることは出来なかったのだと）

アサジは目をつむって自問自答を始めました。

（だから私はチェリアさまを守るために、まずは彼女を守る立場に就くための努力を重ねてきた。そのための六年間だった。

だが、私は本当にチェリアさまのことだけを考えているのだろうか。

自分が引き起こした惨劇の罪悪感から逃れるため、ただそれだけのために、これまで訓練を続けてきたのではないだろうか。でなければ、自分のような者が、あんなにも苦しい訓練に耐えられるはずがない。となれば、結局は偽善だったのではないか。私は偽善者なのではないか。もしかしたら、私は誰よりも卑しい者なのではないのか）

こうした自己像が事実であることを裏付けるように、海鳥たちの嘶きがしだいに激しさを増していききました。

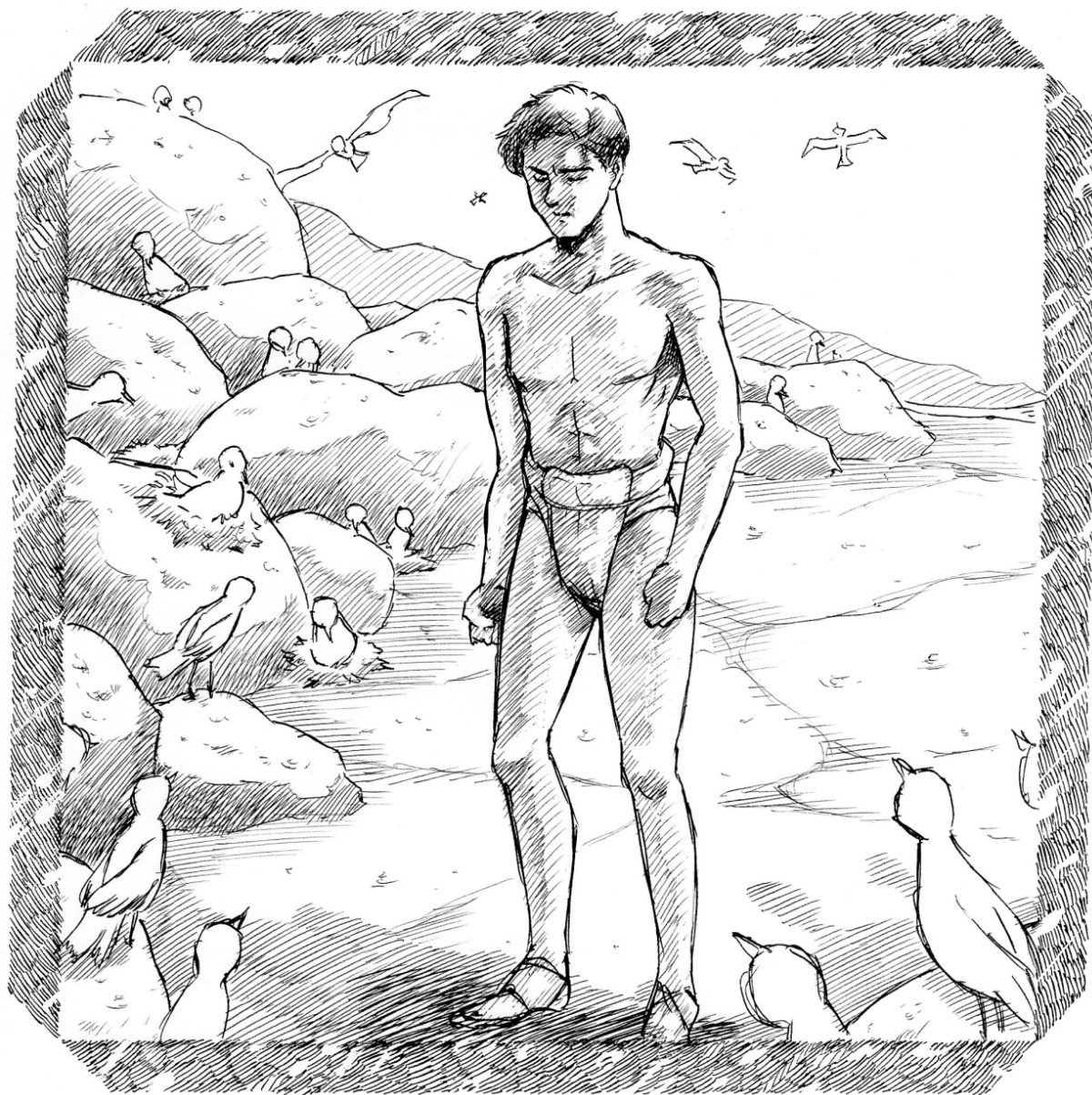
鳥たちは、まるで無慈悲な傍聴人が被告を見つめるように、その厳格な法廷のような空気のなかでアサジを眺めました。そして、アサジ自身による判決が下される瞬間を待っているのです。自分は高貴であるか、それとも卑しいのか、と。

（3）失格者

（分からない。私はチェリアさまが大切だから卵を得ようとしているのか。それとも自分可愛さから卵を得ようとしているのか）

そうやって自分の考えに没入するうち、しだいに現実から遊離しはじめていたアサジの目を覚ますかのように、「ギェーッ!」と、一羽の海燕の鳴き声が、鋭利な刃物のように鬼気せまって響きました。

img021.jpg



（バカな考えだ。ふふ、まるで自分が簡単に卵を手に入れられるような口ぶりじゃないか。私が偽善者で卑しい者であれば、周りをとり囲んでいるこの鳥たちは、じきに私に向かって攻撃してくるだろうに。ふつ、見るからに狂暴そうだな。彼らに襲われたら命すら落としかねないぞ。命がけとあらば、私のような卑しい者には、今からでも引き返すのが一番の良策なのかもしれない）

アサジがそうやって自分の弱さを全面的に認めようとした時、彼の心の奥のほうで「しかし」という言葉が響きました、

（しかし、私が生きたところで何になろう）と。

（私の命は、バッテリーやさまから預けられたものに過ぎない。今の今までそう思って生きてきたのだ。価値なきものが本島に戻っても仕方ないし、ここで失われる命ならば、それこそ私の身の程を示しているではないか。

鳥たちの高貴さによって奪われる卑しい命、それは何と、人殺しである私の最後に相応しいことだろう）

そう思った瞬間、彼の体からすべての力みが抜けていきました。

「高貴であるか、卑劣であるか、鳥たちよ、その答えはお前たちが出してくれるだろう。チェリアさまのために生きられぬ私など、どうなっても構いはしない。さあ、お前たちが思うとおりにするがいい」

そう言ってアサジはモツ・ヌイ中央部へと歩いていきました。

歩いていくうちに周りが静かになっていき、自分を包み込む空気からは、先だてほどの敵意がなくなっているのが分かります。そしてふと気づいた時には、アサジは、すでに海燕の巣の面前に達していました。

「ごめん、大切な卵をもうよう」

アサジの指先に、硬く温かな卵の感触が伝わります。親鳥は怒りの声を上げましたが、その怒気が周りに伝播し、それによって、あたり一面がアサジに害意を燃やすような事にはなりません。

アサジは、間違いなく我が手に握られている卵を見つめながら、

「何とか君たちの敵にならなくて済んだんだね、ありがとう」

そう感謝の意を表すことを忘れませんでした。一息ついてから周りを見渡し、深々と一礼したあと、アサジは来たときと同じように、ただ静かな足取りをもって海燕たちの王国から遠のいていきました。

ところが、海までの道のりを、その半分ほどまで歩いていくと、

（変だな、鳥たちが急に騒がしくなってきた）

と、アサジは周囲の常ならざる様子に気づきます。そして、怪訝そうに横を向いた瞬間、突如として、その頬に抉られるような痛みが走り抜けました。岩陰から誰かが飛び出してきて、そいつがアサジを下から襲撃したのです。

襲撃者の腕力はなまじのものではなく、突然のことでもあり、アサジは危うく気を失いそうになりました。ですが、ぐらついた意識のなかでも卵を守ることは忘れず、また、閉じかけの目は、それでも相手の姿を正確にとらえました。

（イドだ！）

そのイドは、動きの鈍ったアサジを、なおも二、三度殴ると、なかば泣きそうになりながら、彼の手に握られていた卵を奪おうとしました。

「出すぎた真似をするんじゃないよ。勇者になるのは、この俺なんだから！」

「なっ、なにを馬鹿な！ 私よりも誠心優れた者ならばまだしも、自分が勝つために他人を傷つけるような者に、大切なチェリアさまを任せられるものか」

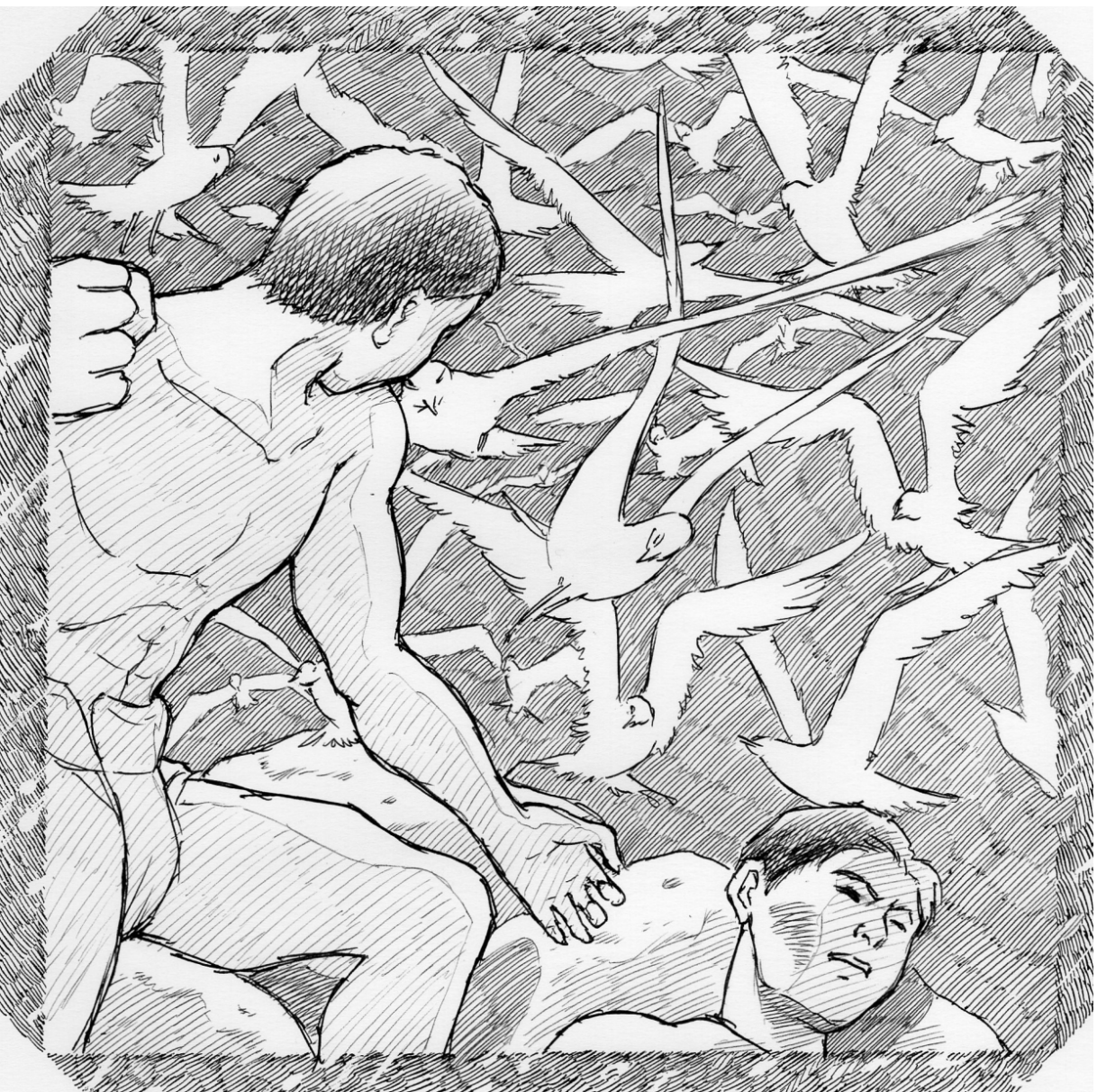
しかし、意識が朦朧としていたこともあって、抵抗もむなしく、海燕の卵は、たやすくイドに奪われてしまいます。

「大切なチェリアさまだと。まるで自分のもののように、あの人を呼びやがって！」

「ちがう……私の命が、あの方のものなのだ」

「ふっ、ふざけるな！」

そう叫んでイドが、とどめの一発となるであろう拳を振り上げた瞬間、ふたりの周囲で騒いでいた海鳥たちが、まるで統制されているかのように、一斉にイドの体をめがけて飛んできました。



img022.jpg

鳥たちの高貴なる心は、イドの不正をして、それを卑しいものと判断したのでしょう。そのためイドは鳥たちの敵となり、その攻撃の標的となったのです。

少年の巨体には、何十羽ともしれない鳥たちがまとわりつき、その鋭い嘴によって、イドの皮膚を無残なまでに傷つけていきました。

「何だよ、どうなってるんだ!」

バッティーヤの事前説明を聞き流していたイドにしてみれば、自分の身に何が起きているのか、いかなる原因で起こっているのか分かるはずありません。

「痛い! 痛い! 痛い! 痛い!」

肝心の卵は、イドの手から落ちてきたのをアサジが受けとめました。そしてイドの動きが鈍くなるにつれて、彼の体に群がっていた鳥たちも、一羽また一羽と離れていきます。

イドは血だらけで、しばらく声を上げることも出来ませんでした。が、狼狽しているアサジの顔を見ると、今までの痛みも忘れて、というより、今までの痛みも手伝って、その心到的外れな憤怒を燃え上げました。

「この、鳥たち……お前の、せいかな?」

黙っているアサジの前で、迷うことなくイドの拳は振り上げられました。おそらく再び鳥たちの襲撃を受けたとしても、それでもなお彼は拳を振りきることでしょう。殺人的な、決定打となる拳を。そして今のアサジには、それに抵抗するだけの余裕がまだ戻っておりません。

しかし、この時、二人の後方から声が響き、その声が、

「失格!」と、高らかにそう告げました。

イドとアサジが振り返ると、そこにはタンガナに参加した最年長選手の姿がありました。

「カラマ……」

状況をはっきりとは掴めなくとも、イドにとって、カラマの落ち着いた様子は、何か恐ろしい事態を予感させるに十分なものがありました。イドは、アサジに向かって振り上げた拳を今さらながらに隠そうとし、震える声でカラマに尋ねました。

「どういう事だよ、何であんたが失格だなんて言うんだよ」

「言いたくはなかったがね……つまり私は、勇者になりたくてタンガナに参加したのではないということさ。」

毎回恒例になっていることだね、遠目からでは分からない不正を確かめるために、選手のなかに一人だけ審判員が混ざるんだ。もちろん、選手たちには分からないようにね。それが、今回はこの私だけのことさ」

イドの驚愕といったら、まったく一様のものではありません。

「まさか、嘘だ。そんな馬鹿な話があるもんか」

「イド、残念だが、君の名を選手名簿から削らなければならない」

「削られる? じゃあ俺は……もう勇者にはなれないんですか」

「当然そうなる。名簿から名前を削られた君は、形式上、このタンガナには参加していなかったことに

なる」

イドは、顔を真っ青にすると、まるで崩れ落ちるようにして地に膝をつけました。目には、いかにも子供っぽい大粒の涙が浮かんでいます。そんなイドの肩をつかんで、カラマが意外なことを話しはじめました。

「実はね、私はタンガナを開催する委員会の一員なんだ。そして、参加年齢に達していない君が、タンガナにどうしても参加したいと言ったとき、それを許そうと初めに言い出した者でもある。幼い君の熱心に打たれたんだよ。

でも不安は付きまとい続けた。いくら体が大きいといっても、君の心は子供のままだろうからね。それで審判員に名乗りをあげて君を見守っていたんだが……結局はこんな風になってしまった。本当に残念だし、僕としても責任を痛感しているよ」

しかし、イドはカラマの話を聞いている風もなく泣きじゃくるばかりです。

「今さらタンガナに、参加してないなんて扱いをされたら、ほかの選手たち、が僕を不審に思うよ。そして、僕がアサジのことを殴ったのが、バレて、そうして僕は卑怯者あつかいされる、んだ。そんなのは耐えられないよ……」

「……」

甘さなのか、それとも優しさであるのか、それが本当にイドのためになるのか分かりませんでした。カラマは、この吹けば飛んでいきそうなイドに、これ以上の心の痛みを与えることが出来ませんでした。「アサジくん……イドが君を殴ったことは、私は誰にも言わずにおこうと思う。イドを失格者としないうために。虫のいい願いだが、それを許してくれないだろうか」

「私は、あなたの言葉に逆らうつもりは毛頭ありません」

アサジがそう言っている間もイドは泣いていました。カラマの思いを理解したわけでも、アサジの厚情に感謝している訳でもないでしょう。イドはただ泣いているだけでした。幼い子供が泣くように、ただ泣かずにはいられなくて。

「二人とも、海に戻りなさい……」

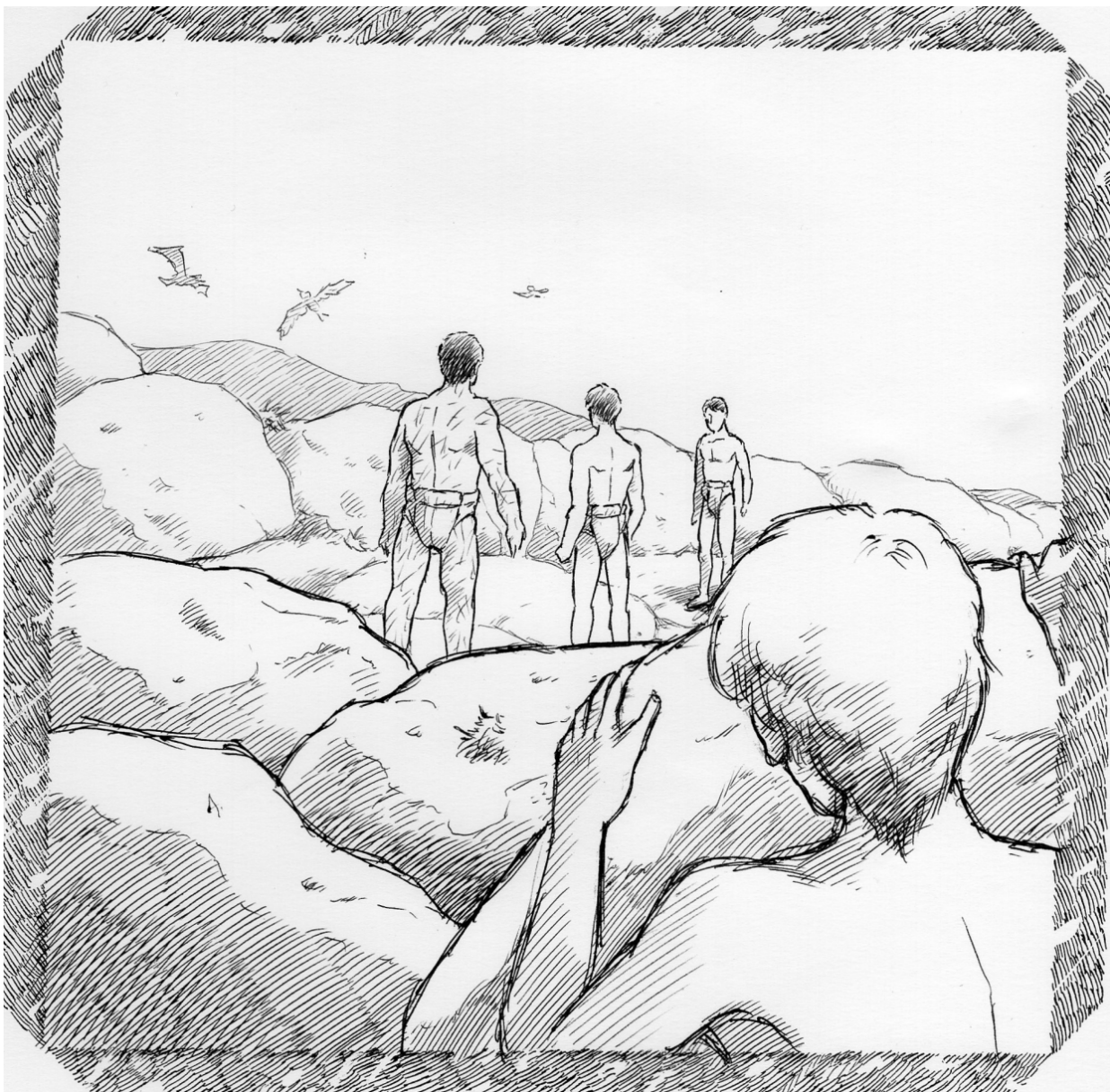
カラマがぐぐもった声でこう言ったとき、折あしく、後続の選手がこの場に通りました。

「おや？」と、その選手が戸惑ったような声を上げます。

三人が三人とも虚をつかれましたが、さらに具合の悪いことには、実はこの選手、たった今この場に通らなかったという訳ではないのです。

彼は近くの岩場からイドとアサジ、そしてイドとカラマの悶着を全て見ておきながら「そんなこと知らない、見てもいない」といった態度を装って姿を現わした者であったのです。

immaginario



この選手は、名をタントリといました。

タントリは抜け目なく、いま初めてイドを見たようなふりをし、

「うわ、悪くすれば、こんなにも傷だらけになるんですね。あれでしょう、心を高貴なものにしないと、鳥に襲われるかもしれないっていう。これじゃ僕は引き返すしかないな。イド君のような子供よりも純真である自信はないし、こんな傷を負うのは嫌だから」

と、妙にしおらしい感じで言いました。

そして、何も知らないカラマは、まさに「我が意を得たり」とばかりに膝をたたき、イドとアサジに目配せしながら言いました。

「そうだな、私もタントリと同じ気持ちだ。アサジ、君は走って海岸を目指したまえ。勝利を諦めた私たちは、君の一位を願いながら、ゆっくりと帰路を進むから」

と、審判という立場を隠し、カラマはこのように言うことで、イドを、不正を働いた失格者ではなく、単に優勝をあきらめた者、という恰好で本島に帰そうとしたのです。イドの傷のことがありますから、帰りはおそらく船を使うことになるでしょうが。

こうしたカラマの言葉の意味を理解したイドは、

（優勝できなかったのは、もう仕方ない……とにかく、アサジから卵を奪おうとした卑怯者としての烙印、失格者としての烙印を押されることだけは避けられるんだ）

と、わずかばかりの安堵を胸に抱きました。が、それをタントリに感づかれてはまずいので、なるべく感情を顔に出さぬよう、深く顔を俯かせてカラマの後ろを歩いていきました。

（4）勝利者

テピト・テアナの本島、オロンゴ岬の浜辺に立つバッティーヤは、いかにも人生の辛酸をなめくした者らしい、厳格な表情をして眼前にひろがる海を眺めていました。唇はかたく引きしめられ、その堅牢なまでの沈着ぶりは、もはや見事と言うほかありません。

が、実際のところ、その胸中といったら、

（神さま、どうか、どうかアサジを勝たせてやってください。）

あいつは六年もの年月を、本当に今日この日のために費やしてきた。それも、自分のためではなしにじゃ。だのに、ここにきて勝負に負け、これまでの苦労が水泡に帰してしまったりしたら、奴はあまりにも惨めじゃわい。ああ、頼みます、勝たせてやってください）

と、その微動だにせぬ容貌とは裏腹に、ほとんど哀願にも似た思いで、ずっとこの事ばかりを繰り返して折っていました。それこそ、選手たちが海に飛び込んでから、いまの今までずっとです。

もしタンガナで勝てなかったとしたら……その惨めなアサジにかけてやる言葉など、バッティーヤに

は、なに一つ見つかりそうにありません。それに本気ではなかったとはいえ、

「もし勇者になれなかったとしたら、そんな不甲斐ないお前の命をわしが奪ってやる」
という約束まで申し渡してあるのです。

もちろん約束を実行する気などは、さらさらありませんでしたが、そのような話をせずに済むのなら、それに越したことはないでしょう。

（船の操舵試験においても、わしの指導が至らなかったせいで、アサジはあやうく試験に合格しそこなうところじゃった。

特訓の中心に泳ぎを据えていたとはいっても、わしには、どうも自分の訓練指導にたいする自信が湧いてこん。きつと、もっと効率のいい訓練の仕方があったにちがいないのに、わしときたら……）

そうして眉間に刻まれた皺が、骨まで達しそうなほどになったとき、バツティーヤの表情が、にわか
に明るいものへと変わっていきました。ええ、そうです。老人の目にアサジの姿が見えたのです。

img024.jpg



前には誰もおりませんから、アサジは間違いなく先頭を泳いでいます。

審判という立場上、その個人的な感情を表立たせる訳にはいかなのですが、着々と自分のほうに向かってくるアサジを見ると、バッテリーヤには、どうしても唇の端が上がっていくのを止めることができません。

（あいつめ……やったんじゃの）

涙と笑顔を両方とも堪えなければならないとは、あまり器用でないバッテリーヤにとっては、実に辛いことでした。

やがて二位以下、そして最後にイドとカラマが船で到着すると、タンガナという大一番を終えた誰もが浜辺で尻をつき、やはりその誰もが大げさに思えるほど、大きく肩で息をつきました。そうとう長い距離を泳いただけに、みな一様に疲労の極みといった様子です。

こうした中、すでに呼吸を整え終えたアサジは、選手たちが集まっている場所から少し離れて、そこから他の選手たちの様子を眺めていました。

それら遠くに見える選手のなかには、仰向けになって涙を流す者までおり、声は届かずとも、勝利を逃がしたことへの口惜しさばかりは、アサジにも痛いぐらいハッキリと伝わってきました。

（これで私が勇者の仕事を務めきれなかったら、彼らに対して申しわけが立たないな）

こう思っていると、少しだけ遠くにいるバッテリーヤが、手招きによって「アサジ、こっちにこい」と、そう言っているのが見てとれました。

アサジが老人の意に従うと、バッテリーヤは他の選手の目が届かないところまでアサジを連れてゆき、そこでおもむろに口を開きました。バッテリーヤの顔は、それまで必死に守り抜いてきた冷徹な審判員の仮面を解かれ、今までの態度からは想像もつかないほど豊かな情感に満たされていました。

「アサジ、タンガナの勝利者となったお前は、わしの後を継いで島の勇者となる。そして、その認定のために、これから巫女が待っている皆へと向かうわけじゃが……その前に、わしに、先代の勇者としてではなく、チェリアの祖父として礼を言わせてくれ。

アサジ、ありがとう。お前が夫ならば、きっとチェリアは、これからの人生を幸せに暮らしていける。本当にありがとう。」

そして、孫のためとはいえ、お前に『わしの言葉どおりに生きろ』などと命じた、この老人の傲慢さを許してくれる。お前の人生を縛ってしまった、このわしの身勝手さを許してくれる」

「そ、そんなもったいない！」

あんなにも厳しかったバッテリーヤが、自分自身と比べ物にならないほど年少の自分に頭を下げている。そうした異様な状況にあたって、アサジは恐縮しきった声でこう言うのを抑えられませんでした。

「バッテリーヤさま、お礼を言うべきなのは私のほうなのです。ここまで、よく諦めもせずに鍛えてくださいました。そのおかげで私はタンガナに勝てましたし、また、もうすぐ勇者になれるのです。ずっと憧れていた島の勇者に」

「勇者に憧れていたじゃと？」

「もちろんです。私は誰よりも間近で、二人の勇者を見た人間なのですから。

コースタニヤさまには、勇者としての、その死にざまを。バッティーヤさまには、勇者としての、その生きざまを見させていただきました。私は、その誇りたかき姿を、ほんとうに誰よりも間近で見ることができたのです。

だというのに、その勇者たちの姿に、私が憧れないなどという事があるでしょうか。お二人は紛れもなく私の憧れであり、そして説明するまでもなく、憧れとは『私もそのようになりたい』という気持ちです」

このように言われたバッティーヤは、ほとんど痛みを与えるまでに強くアサジを抱きしめました。

「それを聞いて、わしは随分と気が楽になった。本当に嬉しい。ではアサジ、お前は今日この日を後悔することはないんじゃないかな」

「ありません、絶対に」

バッティーヤは、すぐにでもアサジと連れ立って皆へ直行したかったのですが、タンガナを取りしきる自分が閉幕を宣言しないでは、浜辺に集まっている選手たちが、どうにも身動きできません。

そのため仕方なく選手たちのところへ戻っていったのですが、そうやって選手たちに近づくにつれ、先ほどまでは声もないほど疲れ切っていた彼らが、今はそれと異なり、異様なほどにざわめき立っているのが分かりました。

選手たちは口々に、例外なくある話題について喋っています。

「イドだろう。あの大きな体のやつだ」

「そう。あいつが優勝したアサジを殴ったんだよ。そのうえ卵を取り上げようとしてさ。いやあ、その浅ましいのなんのって」

「そのせいだろ、あいつの体を見てみな。鳥たちに突っつかれてあのザマだ。あいつきつと、鳥たちに卑しい奴だと思われたんだぜ」

「俺たちも勝てなかったが、あいつみたいに無理やり勝とうとするよりはマシだな」

と、選手たちの誰もが、こうした内容の話を交わしていたのです。

このイドの話題を切り出したのは、言うまでもなく、あのタントリでした。アサジやイド、カラマたちの悶着をすべて覗き見ていた選手です。カラマの配慮も虚しく、イドがしたことは、タントリによって残らず選手たちの耳に届いてしまったのです。

いえ、それだけではありません。タントリの主導のもと、イドの幼い心が、選手たちの生贄にされたのです。

つまり「あいつよりはマシだ」という優越感を得るための生贄にです。不正への糾弾、という正義の行為にかこつけて得る、タンガナに敗れた自分たちの劣等感を埋めるための生贄にです！



イドは浜辺の隅のほうで立ち尽くしていましたが、その青ざめた顔色から察するに、彼が選手たちの非難を耳にしたのは、まず疑いの余地のないところでした。どうやら、その非難に押され、後ずさりするように皆の側から離れていったようです。

そんなイドの隣では、これも同じように青ざめた顔をしているカラマが並び立ち、イドを守るようにして彼の背中を抱いてやっていました。

選手たちが何を話しているか知る由もないバッティーヤでしたが、とにかくこの場を静粛にさせるため、つとめて厳しい声色で叫びました。

「タンガナを閉幕しなければならぬ。もう、おおかたの者は疲れも取れたじょうろから、みな横一列に並ぶがいい」

勇者にそう言われては、もはや無駄話をする者は誰もおりません。その静粛な空気のなかで、バッティーヤの言葉が朗々と語られました。

「十名の若者たちが参加した今回のタンガナだが、知ってのとおり、その結果としてアサジが見事な優勝をたした。よって、島の勇者となる資格は彼が得たことになる。みな祝福し、正式に勇者となった暁には、ぜひ全員で彼を助けてやってもらいたい。」

そして、この事さえ伝えればタンガナは終わりだ。みな、帰って疲れを癒すがよい。では解散じゃ」このバッティーヤの言葉によって、アサジをのぞく全ての選手たちがオロンゴ岬を去っていきました。とはいえ、そのうちの何人かは、すぐに集まって先ほどの陰口の続きのようです。

そして、その何人かの者たちからチラチラと視線を投げかけられているイドは、ゆっくりと彼らが行くとは別の方向へと歩いてゆきました。その隣には、やはりカラマが随伴して歩いています。

アサジも二人の姿を見ましたが、その二つの背中では哀れなほど力を失っており、かけてやるべき言葉を見失わせるほどの深刻さが漂っていました。

（たとい何を言ったとしても、それが僕の言葉であっては、結局はイドを余計に傷つけるだけだ。彼のこととは、カラマさんに任せるのが一番なんだろう）

そう考えたアサジは、離れていくイドに対して沈黙をまもり、その背中に向かって、ただただ憐れむような眼差しを送るばかりでした。

（5）水と米と粥

島の中央にある砦のほうに目を移してみますと、そこには、かの美しい巫女の姿を見いだすことができました。祭壇が置かれている部屋で、巫女チェリアがいかに落ち着かない様子で歩き回っている、そうした姿があったのです。

この砦、平常であれば多くの侍従たちが歩き回っているのですが、タンガナが行われる特別な日とあって、今日ばかりはその勝手が違っていました。

侍従たちは全て家に帰され、門前には、いちおう形ばかりの守衛が立っているものの、しかし砦にかにいる人間といえば、結局チェリアただ一人であったのです。

「この時刻ではタンガナは終わっているはず。だから、もう決まってるんだわ、勇者が。いったい誰が勝ったのかしら」

島の勇者となった者、それは取りもなおさずチェリアの夫となる者でした。

ですが、そのように自分の夫が決められる重大な競技会であるのにも関わらず、チェリアには、そのタンガナの様子を見届けることはおろか、今日一日のあいだは、この砦から一步でも外出することも許されていませんでした。

「巫女なんて、ならずに済むものなら、絶対になりたくなかった。こんなところで報告を待つ以外には、自分の夫となる人が誰なのかを知る術がないだなんて。そんなの絶対にバカげているもの」

けれども窓の外では日が暮れはじめ、祖父のバツティーヤが、そろそろタンガナの勝利者を連れてきてもいい時刻になっていました。もうすぐチェリアにも、新しい勇者が誰なのか、自分の夫になるのが誰なのかを知ることが出来るのです。

本来ならば抽象名詞である「タンガナの優勝者」を待つべきチェリアでしたが、その本心を明かしますと、彼女が「早く来てほしい」と願っているのは、実は不公平にもアサジただ一人でした。

実はタンガナの日取りが決められるずっと以前から、

「私の夫になるのは、アサジさん以外考えられない」

とチェリアはそう思っていたのです。

二年ぐらい前でしようか。このころを境に、チェリアが俄然美しくなってきた、という評判が島のあちこちで立つようになりました。今では、チェリアが母セフィーネ以上の美貌をもっているというのが定評になっています。

「ちょっと前までは子供供していたのに、なんだって急にあんなキレイになっちゃったんだろう」

と、チェリアの変貌を目にして驚くものは数多とおりましたが、その変貌の秘密を握っているのが、誰あろうアサジだったのです。

二年前、チェリアが十二歳の頃のことです。

チェリアは、砦で祖母の手伝いなどをしながら日々を過ごしていましたが、その日彼女は、祖父に連れられて砦にやってきた、ある少年と相まみえることになりました。

すでに何度かの面識があり、会うと、いつでも優しい言葉をかけてくれる大柄の少年。当時のアサジは、そのような目でチェリアから眺められていたのです。そのためチェリアの中には、アサジに対して、親切なお兄さん風の親近感が育まれていました。

砦の通路で、そんなアサジと何気ない会話をしていた時のことです。

「——ほんとう、おかしい話ですね」

と、チェリアが無意識に笑ったとき、アサジはその表情のなかに、雨が降るなかで船に乗り込もうと
していたセフィーネの面影を見たような気がしました。アサジが最後に見たセフィーネは笑っていたの
です。

すると勝手に涙が流れだし、チェリアとの和やかな雰囲気の中に奇妙な影を落としてしまいました。



チェリアは慌てましたが、言葉をかけようとするのをアサジが手で遮り、「何でもありません……何でもないのです。」

ただこれだけは聞いてください。そして、どうか信じてほしいのです。私はいつかチェリアさまを守りできる立場に就き、そうして、この命に代えてでも、あなたの幸せを支えるために尽力します。どうか、私があなたただけのために、ここに存在していることを信じてください」

そう、泣いたままで小さく言いました。アサジの語調は不可解なまでに真剣であり、チェリアは、このとき首を傾げるぐらいの反応しか出来ませんでした。

しかし、アサジと別れて一人になったとき、チェリアには、さきほどの言葉が自分への告白であるように思えてきました。

——この命に代えてでも、あなたの幸せを支えるために尽力します。

実際、受け取りようによっては、これほど熱烈な愛情表現ありません。

以来、チェリアは顔を合わせるたびにアサジを意識せずにはいられなくなり、ひとりでいる時は、ためらいがちに鏡の前に座る機会が増えるようになりました。島のあちこちで「チェリアさまが近頃やけにキレイになられた」という評判が聞こえたのも、この頃からだったのです。

さて、タンガナの日、夕焼けの太陽が、弧を崩しつつ海中に溶けていく時刻となりました。こうして夜も近くなった時分、いままの岩のなかにいるチェリアの耳に、バッティーヤの厳めしい声が聞こえてきました。

「旧き勇者バッティーヤが、ここに新たな勇者を連れてまいった。巫女にお目にかかる」

チェリアは厨房へと進み、そこにある土製のかまどに火を起しました。そこにはすでに鍋が置かれてあり、火の勢いが整ったところで、二、三歩ばかり、かまどから後ずさりします。

チェリアはそこで膝をおり、手をくみ、顔を伏せ、祈るような恰好でバッティーヤたちが来るのを待ちました。遠くに二人分の足音が聞こえてきます。

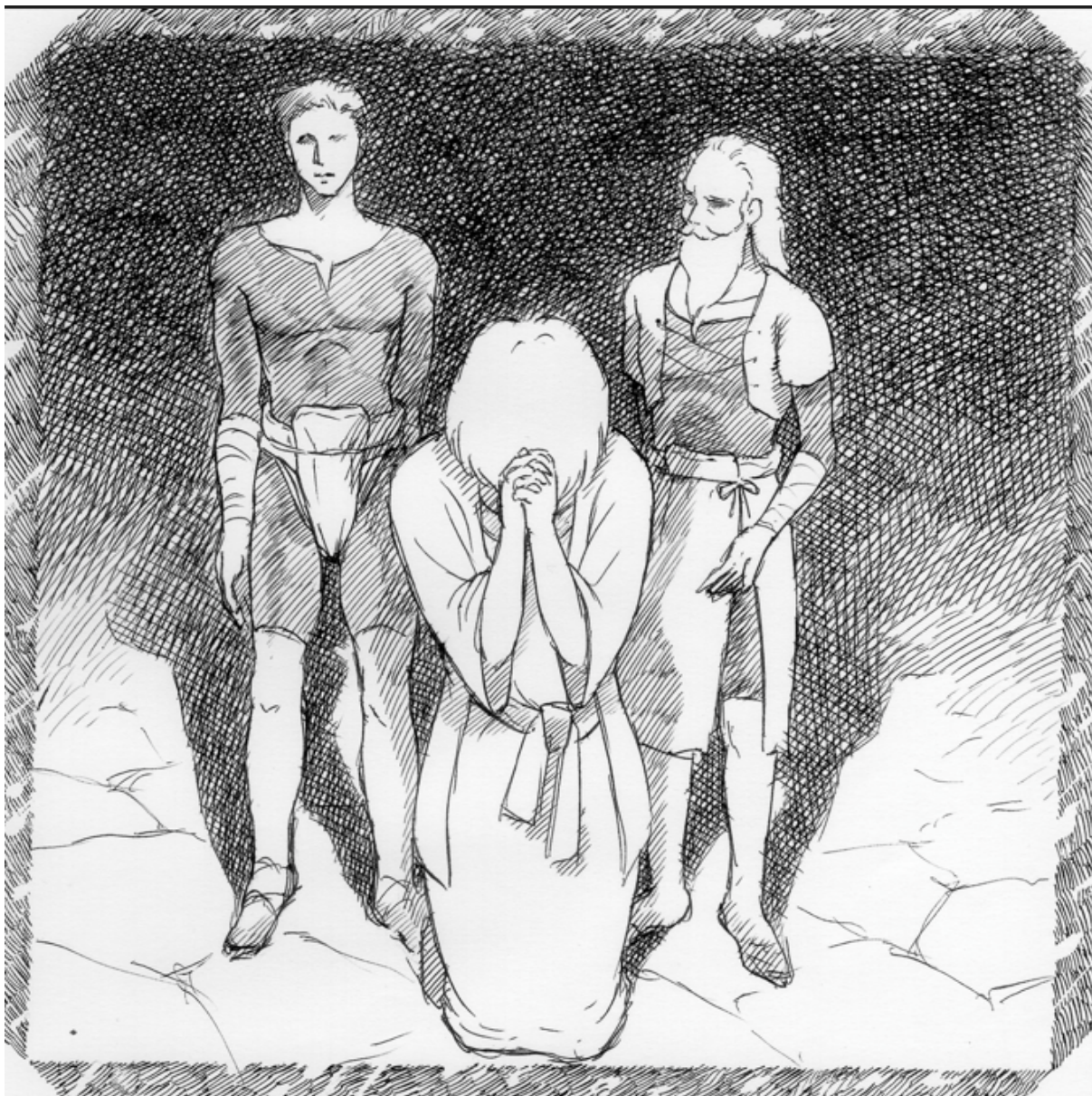
（神さま、これから私に後ろに立つのは、紛れもなく、あなたさまがお選びになった勇者です。よって、つつしんで、その方をわが夫として迎えいれましょう。

ですが……どうか、そのお選びになった勇者がアサジさんであれば、そう祈ることばかりは、ただそれだけはお許しください）

バッティーヤたちの足音が近づくにつれ、巫女の心臓はまるで早鐘のようになり、新旧の勇者が背後に立ち止まった時には、緊張のために震えが止まらないほどでした。かまどの中で燃えている炎が、チェリアの顔を赤く染めています。

「巫女に、勇者バッティーヤが伝えます。権威あるタンガナによって、島の巫女を守るための資格を持った者が選定されました。そして、この者に対し、われバッティーヤが、旧き勇者の名のもとに、新しい勇者となる許しを与えました。」

2023.04.14 (2).png



巫女は、旧き勇者の名を尊重してくださるでしょうか」

「はい」

「ならば巫女チェリアは、島の巫女の名において、この者を勇者であると認めてくださるのでしょうか」
事実上、この質問に答えることによって、チェリアは背後の人物と婚約を交わすことになります。

それは、女の立場からいえば余りにも重みのある返答でしたが、歴代の巫女のなかで、この質問に拒否を示した者はひとりもおりません。チェリアもまた、島の歴史の流れに身を投げ出すばかりでした。

「はい、巫女の名のもとに、彼が新しい島の勇者であることを認めます」

チェリアは無表情に言い切りましたが、巫女の背後に立っている二人は、この言葉を聞くと、それまで張りつめていた緊張が、一気に緩和されていくのを感じました。とくに余生いくばくもないバッティーヤにしてみれば、これで、やっと重い肩の荷を降ろすことが出来たところでしょう。

「巫女の慈しみをうけ、このバッティーヤは、勇者としての役割を最後まで成し遂げることができました。衰えた私にとって、これに勝る喜びはありません。」

旧い勇者は去りますが、新しい勇者が、巫女とともに、これからテピト・テアナの未来を担うでしょう。勇者バッティーヤが、最後の権限をもって新たな勇者を誕生させました。これをもって私は、勇者の任を解かれないと思います」

「コト」と、火にかけておいた鍋の中身が吹きこぼれる音がしました。土鍋をかまどから外すと、チェリアはその鍋を傍らに用意しておいた台に移します。

そして、この時はじめて彼女が後ろを振りかえることが許されます。つまり鍋の沸騰が、儀式の終わりをつげる合図となっていたのです。

頬が紅潮していくのを感じながら、それでもゆっくりと振り向くと、向かって右側にバッティーヤの姿が、そして左側には、背が高くてたくましい若者が頭を下げている姿がありました。

「新たな勇者となったあなた、どうか私に顔を見せてください」

若者の頭が持ち上げられていくと、チェリアには、それが間違いなくアサジだということが分かりました。

アサジは澄みきった目でチェリアに微笑みかけ、それを見るチェリアも安堵と喜びの表情でこたえしました。そして、嬉しさのあまり、アサジに向かって頭を下げ、

「ありがとう……」

と小さく礼を言いました。誰に聞かせるでもない、ただ言わずにいられたただだけの言葉でしたが、この眩きを聞いたバッティーヤは、

「なんじゃ、そのありがとうというのは」

と子供じみた鈍感さと無神経さをもって尋ねました。

「いえ、なんでも。それよりお祖父さま、今日まで本当にお疲れさまでした。」

先代のあとを継いだはずの母が急逝してしまったため、お祖母さまがもう一度仕事に復帰しましたが、なにぶんの御高齢で無理が祟ったのでしょうか。巫女の再就任から、わずか数年で逝ってしまったわけでした。お祖父さまにとっては、とても悲しい事だったと思います」

父母の死にまつわる一切の出来事を知らされていない孫がそう言うのを聞くと、バッテリーやは、チラとアサジを気づかう目をしてから、チェリアの肩に手を置きました。

「いや、お前が妻の死を気にする必要はない。すべては、なるべくしてなった事なのじゃ。ここにわしが、アサジが、またお前がいるようにな。

それより鍋はどうした。あれを食べんことには、本当の意味で今日の儀式が終わったことにはならぬ。そろそろ中身がいい具合に蒸れたころだと思うが」

祖父がそう言うので、チェリアはまだ熱い土鍋を、卓上のほうに移しました。すでに食器は用意されているので、鍋の中身を取り分ければすぐに食事にすることが出来ます。もっとも、実際に鍋の中身を食べるのは、新しい巫女と勇者だけなのですが。

「アサジさん、たくさん食べますか」

空腹と競泳の疲れもあったため、アサジはお願いしますと恥ずかしそうに言い、チェリアは、そんな彼のために初々しい手つきで給仕をつとめました。

こうして二つの器に注がれたのは、空腹のアサジには堪らないくらい芳しい粥でした。それは、かつて母オロティアと食べたような魚まじりのものではなく、水と米だけで作られた純粹なお粥です。

「さあ、これまでの儀式が、新しい巫女と勇者の誕生を祝うものなら、これから先は、いつか結婚する二人を祝うための儀式じゃ。粥と一緒に食べるのが、いわば婚約の証となる。だから、二人とも敬虔な気持ちで、そいつを口にするんじゃぞ」

テピト・テアナたちは十五歳で成人と認められるため、まだ十四歳のチェリアは、結婚を来年まで持ち越されることになります。ですから今できるのは婚約だけなのですが、それはそうと、チェリアにはちょっと引かかる事がありました。

「お祖父さま、婚約の証だと仰いましたが、どうして粥などが、そのような大きな役を果たすのでしょうか、たしかによく分かりません。しかし、バッテリーやは落ち着いたもので、

「それはな、ふたりが水と米ということじゃな」

と涼しげに答えます。その言葉に、アサジとチェリアが同時に、

「私たちが水と米、ですか」と聞きかえします。二人の声が揃った偶然に照れてか、兩人ともハッと口を噤みました。

「多くは語らんよ。お前たちがこの粥の味を忘れなければ、いつかは言葉の意味が分かってくるじゃろう。むろん、その日が来るかどうかは、ひとえにお前たち、つまり夫婦としてのお前たちの精進にかかっておるのだが。

じゃから今は、わしから一つだけ問わせてもらおう。チェリア、アサジを信じ切れるか」

チェリアは少女らしい恥じらいを隠さず、はにかみながら「はい」と答え、となりのアサジが同じように「アサジ、チェリアを守るな」と問われたのに対して、

「はい」と毅然と言うのを、なかば恍惚とした気持ちで聞いていました。実際タンガナを経たアサジの顔には、もはや迷いなどは一かけらもありませんでした。

第3章 創世の物語

（1）日暮れの浜辺

タンガナから数日を経て、勇者アサジの名が島中にくまなく知れ渡った頃、栄光を手にしたアサジとは対照的に、タンガナのもっとも惨めな敗者となったイドは、その大きな体を忽然と人々の前から消し去ってしまい、目下のところ完全な行方不明となっていました。

あの日以降イドの姿を見たという者は皆無で、そのため父母をはじめとする関係者は気が気ではありませんでした。また、姿が消えてから三日もすると、

「イドは、もう島にはいません。船の操舵技術に長けた彼のことだから、今頃は海上を船ですべり、きっとどこかの陸地を目指しているんだ」

などという噂が、まことしやかに囁かれるようになりしました。

島の伝統とでも言うべきなのでしょうが、テピト・テアナの男たちは、何かしら自分に罪の所有を感じると、往々にして、島を離れるという行為にかられることがありました。これは、テピト・テアナの「絶海の孤島」という有りさまを如実に示すものでしょう。つまり、

「近くに陸地がないのだから、島を離れることは、それだけで、死ぬのに近い危険を被ることを意味している。

その危険を越えて、どこかの土地に漂着できたならば、その人間は死界を潜って生まれ変わったも同じである。罪人は海で死んだのであって、陸地に着いた者は潔白な別人なのだ」

という無言律のもとに、贖罪を認めてもらおうという心情があったのです。ですから、

「姿を消したイドも、そうした伝統に従ったのではないか」

そう思う人たちがいたとしても不思議はありません。

しかし、当のイドは、決してテピト・テアナを離れた訳ではなく、たしかに今も島内で生活を続けていました。ただ彼は、考えられるかぎり最も人目につかない所を探しだし、そこで閉じた貝のように静かな日々を過ごしていたのです。

あの日、バッティーヤがタンガナの閉幕を宣言したのちのことです。

イドと、彼のとなりに付き添っていたカラマは、他の選手たちとは離れてアノ・アロイ大火山の方向に、海岸づたいで歩いていきました。

ラノ・アロイ大火山とは、オロンゴ岬を擁するラノ・カウ大火山と同様に、島の三角形の頂点をなす火山のことです。すでに日が暮れかかっている頃のことでした。



そうして歩いている途中、イドが胸苦しげにカラマに対して言いました。

「もう、いいよ。もう一人で歩けるから、あんたはここで帰ってくれ。俺はもう誰とも話したくないし、誰とも一緒にいたくないんだ」

「冗談じゃない。こんなに傷ついている君を放っておけると思うのか」

カラマの言葉には純粋な労りがこめられていましたが、それに向かって、傷だらけのイドが烈火のごとく怒ります。

「傷つけたのは誰だよ！ あんたとアサジじゃないか！ あんた達さえいなかったら、俺は、この俺は今ごろは……」

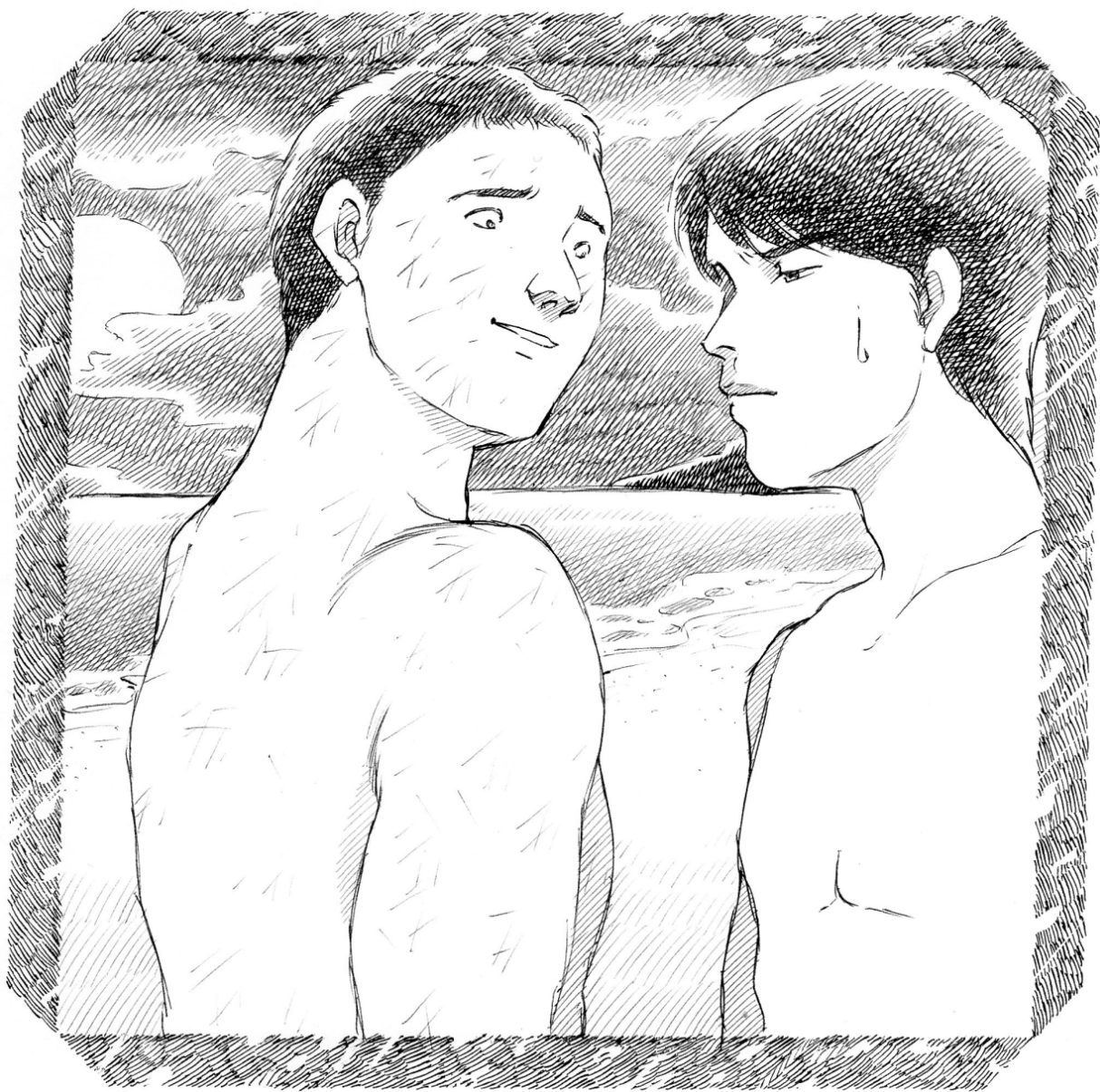
「勇者になっていたというのか。だが、たとえ勇者になっていたとしても、その肩書は君を苦しめる事にしかならなかったはずだ」

「やめてくれ！ 勇者になれなかった今、俺はこんなにも苦しんでるんだ。

頼むよ……俺の前から消えてくれ。今は一人にならないと、まともでいられる自信がないんだ。そばに誰かがいると思うだけで気が狂いそうになる。だから頼むよ」

「だが、それじゃ……」

すぐるようなカラマの顔は、それを見るイドの表情を、急に大人びたものへと一変させました。少年の唇には、諦念じみた微笑みすら浮かび上がります。



「頼むよ、一人にさせてくれ。安心していいからさ。」

今あんたが消えても俺、それであんたを恨むようなことはしないから。あんたが優しいってことは、それだけは分かるから……それに子供のすることなんだぜ、気が済んだらすぐに家に帰るさ。そんなに深刻になることはないんだよ」

そう静かに告げられると、カラマには、もはやイドの後を追いかけることは出来ませんでした。カラマには、傷ついた少年が宵闇のなかに消えていくのを、ただ黙って見つめていることしか出来なかったのです。

やがて夜の暗がりのなかに、うつすらとラノ・アロイ大火山の山稜が浮かび上がります。一人で歩いているイドは、その山稜の形と大きさを確認すると、

「ということは、このあたりの林に隠れているはずだ」

と、木々が立ち並ぶあたりを熱心に探しまわり、そこに、ずいぶん朽ちているけれども、どうやら家の残骸らしいものを見つけました。

「あつた……まだあつたんだ、俺たちの基地が。」

昔やった基地あそびは楽しかったな。みんなと、この小屋に隠れてさ。だって大人たちは誰もここを知らないんだから。結構いいところなのに。海までいけばエビだって採れるのに……はは、美味しくない、痩せこけて小さなエビだけどさ、みんなと食べるとそれでも美味しかった」

イドの脳裏に、にこやかな少年たちの顔が明滅します。

「今は、まわりに誰もいない。どうして、こんな事になっちゃったのかな。あの頃に戻れたらいいのに」過去に戻ることは出来ませんが、まわりに誰もいない、というのは確かにそうでした。このラノ・アロイ大火山の付近は、島でも極端に集落が少ないところだったからです。

面する海で大したものが採れなかったのが、その主たる原因でした。イドが言うような小さなエビがせいぜいのものです。

わざわざそんなものを漁るために海岸を訪れる者などまずいませんから、この辺りにさえいれば、イドが当初から望んでいたように、誰とも会わずにいることは、ごく簡単に叶えられそうでした。まさに一人きりになるためには絶好の場所であつたのです。

それと、カラマに対して「子供がすることなんだから、気が済んだらすぐに帰るだろうよ」と、その日のうちにも、自分が家に帰るようなことを匂わせたイドでしたが、実際には、彼は、この海岸で独り暮らしをするつもりでいました。

それが何日間になるか分かりませんが、とにかくそうせずにはいられない気持ちだったのです。

とはいえ、そうした侘しい生活も、今日で六日目になります。

いつものように日没前の海に入っていくと、足を洗う波は思いのほか冷たく、お目当てのエビも、たった三匹採れただけにとどまりました。

「くっそ、これだけかよ」

体が大きく、まして食べ盛りの頃でしたから、小さなエビ三匹という粗食にはひどく堪えるものがあ

ります。

「家にいたら、さぞかし腹いっぱいに食べたんだろうな」

そう思いつつも、やはり家に帰る覚悟はつきそうにありません。イドはエビを採ってもすぐには小屋に戻らず、しばらくの間、まもなく沈みきろうとしている太陽をじっと眺めていました。じっと身じろぎもせず、目に涙を滲ませながら。

太陽が完全に沈むと、イドはわずかに採れたエビを焼いて、それを夕食としました。そんなものを夕食と呼ぶならなりません。もちろん満腹感など期待できようはずありません。

ですが食物のかわりに、悔しさがイドの腹を満たしました。夜の冷気のなか、このような場所で空腹に苦しまなければならない悔しさ、それがイドの腹に溜まっていくのです。

「こんな事になったのも、すべてはタンガナに参加した選手どものせいだ。アイツらが、俺のしたことを黙っててくれなかったからなんだ。

俺がアサジを殴ったことは、アイツらが、もう島中に報せちまったに決まっている。今では島の誰もが俺のしたことを知っていて、それでもって……俺を、俺をみんなで馬鹿にしているんだ。イドは卑怯者だって、そう言ってる。

畜生、いつか島の奴らみんなに復讐してやる。四の五の言うやつは、ああ、殺したってかまうもんか！」

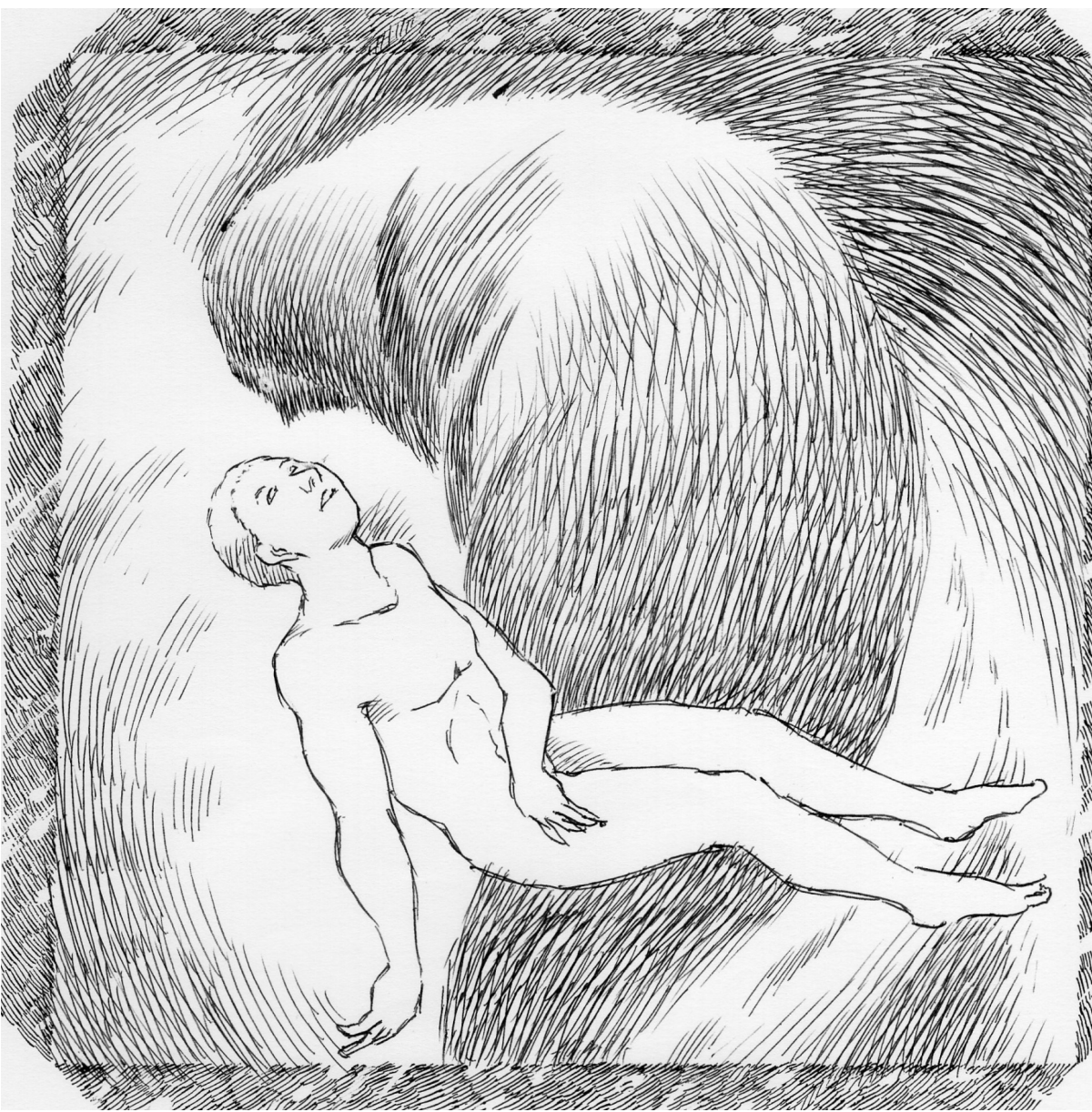
このような憎しみで空腹を満たすイドでしたが、彼はその夜遅くにある夢を見ました。なにか黒い霧のようなものが目の前を覆い、その霧がものを喋ってくる夢です。

その黒い霧とイドは次のような対話を交わしました。

「聞こえるか……お前に……我が声が、聞こえるか」

「誰だよ、霧の中に誰がいるのか」

img031.jpg



「誰と問うても我に人の形はない。なぜなら我は霊であるから。強大な霊であるから。しかし霊は、肉体という依代を持たなければ、その力を現世で発揮することが出来ない。小僧、お前は私の依代となるか。なるならばお前に大いなる霊の力を与えるが」

「俺に力をくれるだって？」

「いかにも。我に命を捧げれば、お前が憎む者たち全員の命を奪えるだけの力をやろう。だがお前に、自らの命を投げ出す勇気があるか」

そう言われて、イドに迷いがあるはずありません。

「やつらに復讐できるなら、こんな命、いくらだって差し出すさ」

「ならば力を与えよう。そのかわり、お前の命はもう私のものだ。もはやお前のものではない。だが、それ以上のこともある。我に魂を捧げれば、お前を私と同等の存在にしてやろう。すなわち悪魔に」

「悪魔だって？　じゃあ、お前は悪魔なのか。俺は悪魔と喋ってるのか」

と、驚いて目がさめたところが夢の終わりとなりました。

このように不思議な夢を見るのは、イドにとって初めての事でしたし、それが夢のくせに奇妙な現実感を帯びているのが気にかかりました。

ですが、自分の体を眺めてみる限り、夢で言われたような力が与えられているとは、少しも感じられません。

ですから、まあ、夢はしょせん夢だったということなのでしょう。イドには、確実にそのように思えましたし、だから彼は、その日のうちにも、不思議な夢を見たこと自体を忘れてしまえたのです。ええ、まさに完全に。

それがいつか、彼にとって、重大な意味を帯びてくることも知らずに。

（2）キンナラという老婆

劣等感に苦しむイドは、自分に対する人々の視線を大変気にかけていましたが、事実、彼がしたこと知らない者は、島にほとんどいないと言っても過言ではありませんでした。

アサジを殴ったというイドの話は、あつという間に島中に浸透していき、少しすると、彼が行方不明になっていることも話題になりました。それと同時に、先述した離島の噂も流れはじめ、かくしてイドは、島における話題の中心にまで登りつめたのです。

「でも可哀そうだよ。幼い身でタンガナに参加して、その精神の未熟さのために失格者の烙印を押されたんではさ」

「私たちタンガナの参加者も、今さらですが、あのときは大人気ないことを言ったものだと後悔しているんです。」

それほどの悪意を込めたつもりはないのですが、あのときの私たちの囁きは、イド君にとって耐えがたいほどの苦痛だったのでしょう。こうして姿を消してしまったことを知るに及び、自分たちの浅はかさが情けなくて仕方ありません。今すぐ彼に謝りたいぐらいです」

イドの思い込みとは逆に、彼をあわれむ者は、彼がしたことを単純に責める者よりも遙かに多かったのです。

こうした空気の中で、あの、事件の目撃者であり広報者でもあったタントリが、自分の居場所をなくして家を出て行ってしまうという事件すらありました。

今、もしイドが村に帰ってきたならば、彼を責める者はまずなく、その帰りを知った多くの者がイドを歓迎してくれたことでしょう。

しかしイド自身が考えている「現実」はあまりにも暗く歪んでしまっており、その歪みを彼に指摘してあげられる者もまた、イドの周りに居はしなかったのです。

イドはあれからも幾度となく島人たちを恨み、幾度となく心のなかで島人たちを殺しました。そうして幾度となく悔し涙で枕を濡らしました。食事はいつも貧しく、その貧しさがイドの憎しみを一層あおり立てるのです。

この日の夜も、すでに真夜中を過ぎていましたが、それでも未だに眠ることが出来ませんでした。今もどこかで自分をあざ笑っている奴がいるかと思うと、燃えるような悔しさに血脈が沸き立ってくるのです。

「何も考えずに眠れたら楽なんだろうけどな、腹が減つてると眠れもしない……」

そうだ、どうせ眠れないならエビでも採りにいくか。今夜はそれほど冷えないし、体は熱いぐらいだ」
そう言いながら、イドは海に向かって歩いていきました。何気なく見上げた夜空には、青い三日月がかかっています。

「お、これで十六匹目だ」

この夜エビは思いがけないほど沢山とれ、数えてみれば、ここに住んでの最高記録になっていました。ほかに食用の海藻なども見つかり、これらを持って帰れば、さしあたり深い眠りを誘ってくれるだけの食料にはなってくれそうでした。

「じゃ、ぼちぼち終わりにするか」

と、イドは小屋に戻ろうとします。しかし、そのつもりで波間から上がろうとしたとたん、彼の脛のあたりに、まづもって魚や海藻ではありえない、妙に肉厚で柔らかいものが当たりました。

「うわっ、なんだ！」と、思わず大声をあげるイドでしたが、そう叫んだ間にその「何か」から飛び去った距離も大層なものでした。

img032.jpg



図らずも持ちえた距離を挟んで見てみると、その得体の知れないものが、どうやら丸太にしがみついた老人だということが分かりました。どうやら気を失っているようでしたが、それでも、ちゃんと息はしているようです。

「どうする、一応は介抱してやるか」

イドは濡れた黒衣をかぶった老人を背負うと、そのまま小屋まで連れ帰りました。そして、エビを焼くために焚きつけた火の傍で、あらためて老人の顔を眺めます。

「こりゃ婆さんだな。しかし人相の悪いこと悪いこと、今は目が閉じられてるけど、こいつが開いたらどうなるんだい」

「こんな風さ、イド」

その言葉とともに、まるで人事不省とも思えた老婆の目がカッと見開かれました。

「なっ、気づいていたのか。ああっ、なんで俺の名前を！」

「ああ、わめくな。うるさいね、こっちの苛立ちが増すばかりだ。ほんとにイライラする。お前があたしを呼び寄せたおかげで、こっちは大波に揉まれて死にかけたんだ。とにかく、まずは謝りな。いま謝っておくと、あとで辛い目を見ずに済むかもしれないよ」

「はあ？」

イドには、この老婆が何の話をしているのか、皆目見当が付きませんでした。あまつさえ謝罪しろなと言われても、そんな唐突な求めに、応じられるはずありません。

「身に覚えのないことを謝れるかよ。それよりお前、俺の名前を知ってるってことは、初めて見る顔だけど島の奴なんだな。」

訳の分からないことを言いやがって。俺を探しに来たのなら無駄だぜ、俺は帰らない。だからさっさと村に戻れよ。けど俺の居場所をバラしたら、意地でもお前をブツ殺してやるからな！」

しかし、その小屋が揺れるほどの迫力にも、老婆はただ笑うだけで、イドの怒声などは、てんで屁でもない様子です。

immaginario



老婆が言います。

「あたしはキンナラってんだ。島の人間じゃないよ。つまり異国人でね、ご主人さまに遣わされて、わざとここまでやってきたんだ。お前の名前もご主人さまから聞いたんだが、イド、お前だって、あの方と話をしたんだろう」

「ご主人さま？　俺がそいつと話したっていうのか。知らないぞ、ちっとも」

「ほう、どうやら忘れちゃったんだね。でも、忘れられた約束だって、約束は約束だ。あたしは、あなたの願いを叶えるよ。約束のとおりだね」

「世迷いごとは止してくれ。約束なんてした覚えはないんだ」

キンナラは、フンと侮蔑をこめて鼻を鳴らしました。

「タンガナで負けたあんたは、ずっとアサジのことを憎んでたね。」

そしてタンガナに参加した他の男たちも憎んでた。いや、それだけじゃない。お前はすべての島人たちをも憎んでいたんだ。島人を、今もお前を馬鹿にして、今もお前を嘲ってやまない奴らのことを」

その老婆の言葉は、イドの顔を真っ青に変えるのに十分な的確さを持っていました。

「あんた、一体なんでそんなことを……」

「だからご主人さまに教えてもらったんだよ。まったくね、子供ってやつは、純粹だから歯止めつてものを知らない。それにイド、お前はどうかやら、人よりも念ずる力が強いんだ。」

そういう人間が激しい憎しみを育てていると、このブ厚い結界をめぐらせた島であってもね、抜け道が出来るんだよ。あたしたちが通るための抜け道がね、分かるかい。

ふふ、あたしたちが、どんなに長いこと、この島に忍び込むと思って、結局それが出来なかったことか。それを、お前のような奴が島の内部に現れたことで、抜け道ができた。そして、とうとう、あたしがかここまで来ることになったんだ。ひひひ」

そのキンナラの言葉は、動揺するイドの耳には、もはや一つも入っていません。実際イドの動揺ぶりを見ていて気の毒なほどでしたが、彼は、もはや絞り出さなければ出てこない声に、それでもなお虚勢をおり混ぜずにはいられませんでした。

「たっ、確かにあんたは俺の心を読んだよ。だけど、あんたみたいな人相の悪い奴を信用できるはずがないじゃないか」

キンナラはもう一度フンと鼻を鳴らしました。

「信用しようとすまいと勝手にやらしてもらうさ。契約は済んでいるんだし、あんたの命は、もうあたしたちのものなんだから。それに、あたしがするのは、もともとお前が望んだことなんだからね。島人全員への復讐ということはさ」

「島人全員への復讐……」

「そうさ、すべては、その目標に向かって進んでいくんだよ。あたしたちのこれからは。嬉しいだろう、ねえ」

「……俺は……その……」

なるほどキンナラが叶えようとしていることは、たしかに自分が望んだことの実現ではあります。しか

し、いざ、それが実際に叶うとなると、不甲斐ないことに、急に下腹のあたりが底冷えしてくるのです。（このババアは、イドっていう俺の名前はよろか、この心の中までも知っていた。こんな不思議なことはないだろうし、だとすれば、俺の願いも本当に実現するかもしれない。だけど、そんな事が叶ってしまっているのか）

イドが何も言えずにいるのを、キンナラが苦々しく不快がりました。

「なんだい、あれだけ人を憎んでおいて、いざ思いが果たされるとなったら、急に尻込みかい。お前さん男だろうが。」

なのに、ずっと島の奴らに馬鹿にされたままでもいいってのかい、弱虫め。自分の憎しみに対してまで卑怯者になるのかい。いいかい、島の連中は、今だってお前を馬鹿にしてるんだよ。お前を卑怯者だっって言ってるんだよ」

「うっ、うるさいな。とつぜん変なことを言われたんだから、何も言えなくなったって仕方ないじゃないか。俺はちょっと外に行く。そこで考えさせてくれ」

そう言い、イドは老婆に背を向けました。

そうして小屋から出ると、イドの充血した目に、いきなり眩いばかりの太陽の光が飛び込んできました。すでに朝日とはいいたい太陽があたりを照らしていたのです。エビを捕まえていたときには真っ暗だったのに。キンナラと話している間に、思いのほか時間は流れていました。

「きれいだ……」

イドはそう言いましたが、その感嘆は、やがて悲しい思いを引き寄せていきます。

（そうだ、キレイだよ。太陽め、お前は、あの暗い夜をどこにやってしまったんだ。お前は、あの暗い夜を追い出すことで、今のうのと光ってる。そんなにもキレイに、それまで暗い夜があったことを忘れたように。そう、お前は暗がりを完全に無視することで、自分の光を完全なものにするんだ）

かっと目を見開いて太陽を眺めるイドの目に涙が浮かびます。

（島の奴らも同じだ。俺という人間がどんなに苦しんでいるかも知らず、俺を無視することで、その明るい毎日を送っていやがるんだ。俺を無視することでこそ、俺を遠く嘲笑うことでこそ、その穏やかな笑顔を浮かべていられるんだ。

だとしたら……太陽よ、お前が夜を受け入れてくれないなら、夜はお前に対立するしかないじゃないか。島の連中よ、お前たちが俺を受け入れてくれないなら、俺はお前たちに対立するしかないじゃないか。たとえ、あの魔物のような婆さんの仲間になっても）

こうしてイドの居場所は決められました。それは夜の中、暗がりの中、憎しみの中、そしてキンナラの術中の中でした。

(3) デルフィー

それから一週間が過ぎると、これまで誰も来なかったラノ・アロイ山麓の海岸、すなわちイドが居住していた海岸は、異様なまでの人だかりに満たされるようになりました。

まず、イドが隠れ住んでいた小屋を改装し、ここにキンナラが店を開いたのが始まりです。店で扱っているのは「デルフィー」。一種の薬品です。

そして、その宣伝文句は次のようなものでした。

「島民のみなさん、どうです、あなた方が尊敬している巫女さんと同じ体験をしてみたいとは思わいませんか。巫女は天の意思を感じられるというが、他方、島民の皆さんには、そいつを感じることが出来ませんでしょう。」

でもね、このデルフィーを飲むと、巫女と同じ体験ができるんですよ。味わってみたいでしょう、あの偉い巫女さんと同じ気持ちをさあ。同じ体験をすれば、今よりももっと巫女さまの気持ちを分ってあげられるし、それは巫女さんも喜ぶことだと思うんですけどねえ」

そのようにキンナラは言いましたが、早い話が、このデルフィーは幻覚剤、つまり麻薬なのです。麻薬によって、島民たちにも、巫女が味わうような神秘体験をさせようというのがキンナラの狙いでした。

しかし、キンナラが言っていることに根拠がないわけではありません。巫女は天上の意思を感じる際に、一種の宗教的な、神秘的な高揚感を味わうのですが、その高揚感は、幻覚剤を飲んだときに味わう感覚と、極めてよく似ているからです。

そのため——一般論ですが、誤った宗教は、よく麻薬に結びつきます。そして、どうして麻薬と結びついた宗教が間違っているのかは、それが信者に未来を与えないからです。

正しい宗教と、それに伴う神秘体験は、その人の心に働きかけ、更生し、高め、豊かにすることで、輝かしい未来を彼に贈ることになります。

それに対して麻薬を使った神秘体験は、似たような心的体験をさせるものの、信者の体にまで働きかけ、副作用を与え、依存性を与え、その結果、著しく健康を損なわせることになります。つまり麻薬が、信者の未来を奪っているわけです。そんなものが正しいはずがありません。

しかし、副作用や依存性が現れてくるのは、麻薬を飲んでからしばらく経ってからです。ですから、それまでは事の善し悪しが分かりにくい、そうした盲点があるのも事実でした。そして、キンナラが目をつけたのは、まさにその盲点だったのです。

「客に依存性が現れば、もうこっちのものさ。そいつらはもう、あたしら無しではいられなくなるからね。そうなれば、島の秩序や巫女の影響下から離れて、あたしたちに与する奴らが沢山できることになる。」

まったく簡単な勢力拡大だよ。とにかく人数を集めないと何も出来ないからねえ」

ところで、キンナラの店にはイドの姿もありました。

「あたしが店主をするから、イド、お前は店員として手伝っておくれ。もっとも、そのままじゃ正体がバレちまうから、そうだね、顔に泥を塗りこんで、異国人のフリでもしてもらおうか。あたし共々、島に漂着した異国の薬売りを決め込むんだ」

「なんだよ、異国には、真っ黒い人間がいるのかよ」

と、しぶしぶながら老婆の意向に従ったイドでしたが、いかにも異国人らしい片言を使って薬の宣伝をしにいくと、近くに点在する村で「デルフィー」はすぐに有名になっていきました。それで興味を覚えた人たちが、やがてキンナラの店に集まってくるようになります。

img034.jpg



「ワタシ、薬売り。教えてモラタから、少し言葉わかる。薬キク。この薬オモシロイ。飲んだら神サマに会える。巫女みたいニ。店スグにくるとイイ」

イドが意外なほど見事な演技を見せたので、来店する客のなかには、ただこの黒人の少年が珍しくて物見にやってくる者もいました。そういう者も少なからずおりましたけれども、しかし大部分の客は、やはりデルフィーそのものに興味を持っていたようです。

一言で言えば好奇心なのでしょうが、門外不出の巫女の神秘が、苦勞もなしに味わえるというので関心が持たれたのです。しかも、キンナラは、それが巫女にも喜ばれることだと言ったのでなおさらでした。「あたしは、すでに巫女に会っている。巫女もデルフィーの効能を認めている」

そうキンナラは言ったのです。実に見事な詐欺の才能と言うほかありません。

「ただしイド、宣伝はなるべく男だけにするんだ。女は変に分別がつくから、あたしとしても子飼いにしにくいんだよ。その点、男はバカだから飼いやすい」

そうしていざ島民たちがデルフィーを飲むと、確かに酒に酔ったような、けれどもそれをもう一步踏み込んだような酩酊感があります。宙に浮いて光に包まれるような感じがするのです。

当然「これは面白い」という評判が立ちましたし、店には、島のあらゆるところから客が集まるようになりました。

こうした中、キンナラがしていることに不審を感じたイドが、

「婆さん、薬を売るのはいいけど、それで島の男たちを面白がらせてどうするんだよ」

と、キンナラを皮肉るように問いたしました。すると老婆は、

「光で招き、明暗の妙で引き込み、そうして影のなかで縛る。人を陥れるっていうのは、こういう手順ですもんなのさ。だから、いまは光をばらまいている。けど、イド、すぐに面白いものが見られるはずだよ」

と言ってニンマリと笑いました。

デルフィーは液状の薬ですが、キンナラは日ごとにその濃度を上げていき、薬の効能が次第に強くなるように仕向けました。そんなキンナラの思惑を知らない客は、

「光が見える。すごい、巫女はこんなものを見ているのか。優しくて大きなものに包まれているようだ。なんて幸せな気持ちなんだ」

と、ほとんどフラフラになって薬の快楽に咽びました。

「そんなすごいのか、なら私にもだ。私にもデルフィーを売ってくれ」

そう言って薬を飲んだ誰もが快楽にうち震え、なおさらにデルフィーを買い求めました。デルフィーが自分たちの体を蝕んでいるという事に気づくには、島の医学は、麻薬に対してあまりにも無知すぎました。

しかし、薬の評判が揺るぎないものになり、島でデルフィーの名を知らぬ者がいなくなったところ、客たちの内部で蓄積されていた異常性が、遅まきながら、目に見える形で表れ始めました。つまり、薬の

禁断症状が見られるようになったのです。

デルフィーを服用するたびに「いい気持ちだ」とか「幸せだ」とか言い、そうしてだらしない笑みを浮かべていた男たちでしたが、近ごろでは、その笑顔がそうそう長くは持ってくれません。つまり、服薬時からしばらく経つと、妙に気分がイライラしてくるのです。

そのためどこでも、とくに家庭に戻ると、彼らはまるで、デルフィーの服用時とは別人にでもなったかのような、気荒さを呈するようになりました。

そのうち、島の到るところで怒号が轟くようになり、路上での口論や殴り合いが日常茶飯事になりました。

以前のように熱心な働きぶりを見せる男たちは激減し、向上心と穏やかさにあふれた男たちの生活態度は、いまや、人を見れば争わずにはいられないような、それほどにも気短で混乱したものへと墮落していたのです。

そのような者たちであれば、人に対するへりくだりなど、一片たりとも持ち合わせていなさそうですが、こうした無頼じみた様相の一方で、彼らはデルフィーを売っている薬売りたちに対しては、ほとんど卑屈にも見えるような従順さを示していました。

しかも、その何割かは、もう紛れもない中毒症状をさらけ出しており、しまいにはイドに向かって、地に頭をすりつけながら哀願する者まで現れたのです。

「すみません、お金はありませんが、どうしてもデルフィーを譲ってほしいのです。もう、あの薬なしでは一日といられません。どうかお願いします」

イドは、そのような哀願者に向かって、一様に、

「ドウシて私が、困っているアナタがたを見捨てるコトが出来るでショウ。どうぞ、コレを飲んで楽しんでクダサイネ。お金はイリマセンカラ」

と訛った前置をしてから、無償でデルフィーを施しました。

A black and white line drawing depicting a scene of religious devotion. In the foreground, a man is kneeling on the ground, facing away from the viewer. He is wearing a simple t-shirt and has his hands pressed together in a prayerful gesture. To his left, a woman wearing a headscarf and a long dress is leaning over him, pouring water from a small jug into his hands. To his right, an older woman, also wearing a headscarf, stands smiling and watching the interaction. The background features several stylized, rounded trees or bushes. The entire scene is framed by a decorative border with a repeating pattern.

正体を隠すために「マゴラー」と名前を変えたイドの「お金はいりません」という言葉は、薬を求めてやってくる誰をも、啞然とさせずにはおきません。

「そんな不思議ソウな顔をしないでクダサイ。確かに利益はありませんが、私たちは、ただアナタガタが楽しんでクレレば、それデいいのです」

男たちの喜びようは大変なもので、中にはその場で、浴びるようにデルフィーを飲む者までいました。「ひひ、そう、それでいいんだよ。まったく巧いもんだね」

本日、何度目かの名演技を見せたイドの肩を、徹夜明けのキンナラが軽く叩きます。

「婆さんか、デルフィーの調合は済んだのかい」

「ああ、もう金を貰うのが馬鹿らしく思えるほど大量にね。出来た粉を水に溶かせば、いくらだってデルフィーは出来あがる。ああ、いくらでもね」

さて、金が尽きた客の来店が増えるにつれ、いつの間にかキンナラとマゴラーの二人は、

「偉大なるキンナラさま、マゴラーさま。どうか私たちのために、聖なる薬デルフィーをお与えください」

と、薬なしではいられなくなった男たちから、まるで全能の神のごとく崇め奉られるようになりました。店を閉めた後でないと普通に喋れないという難はあるものの、こうなるとイドは面白くて仕方ないらしく、

「婆さん、奴ら本当にバカだよな。俺たちのことを神さま扱いして拝んでるんだぜ。卑怯者だって馬鹿にしていたはずの俺に対してもさ。何だが胸がスーっとするよ」

とキンナラに笑いながら言うのを止められませんでした。

それとは対照的に、キンナラのほうは不気味なまでに冷静です。

「フン、本番はこれからさ」

「本番？」

「ああ、ぼちぼち引っ越しを始めるよ。いいかい、明日、店に来た男たちを伝令役にして、ほかの顧客たちにもこう伝えさせるんだ。

『キンナラとマゴラーは、人目のつかない所に引っ越しをする。だから、あたしたちに付いてこないと、デルフィーはもう手に入らない。デルフィーが欲しいなら、真夜中に店の前に集まりな。それから皆で引っ越しだ』と」

それは、イドにとってはあまりにも突然のことでした。

「何だよ、男たちと隠れて何をしようってんだよ」

「なあに、ちょっとした教育を施そうかと思ってね」

（4）オンパロス

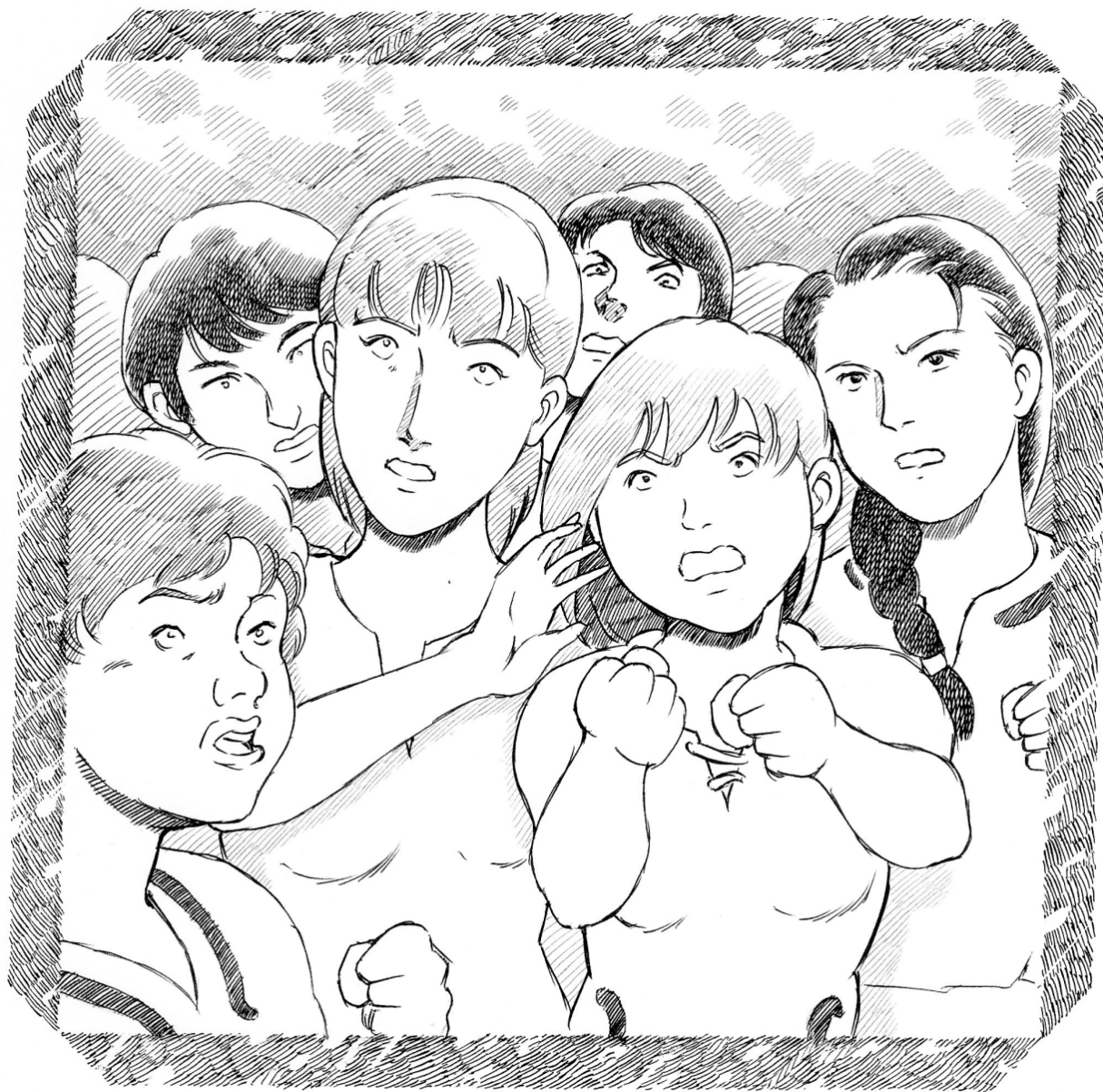
デルフィーの蔓延による島の混乱は、大した間を置くことなく、巫女チェリアの耳へと伝わっていました。

いえ、伝わるどころの話ではありません。砦には、すでに何十人もの女性たちが訪問しており、山のような苦情を持ちかけては、まだ巫女の仕事を継いでから一月にもならないチェリアを、大いに悩ませていたのです。

「聞いてください。私の夫は、妙な薬を飲むようになってから、人が変わったように怒りっぽくなり、今では家に帰っても来なくなりました。

私には、そんな夫を家に引きもどす力はありません。しかし、男手をこのまま失ってしまったら、私たち家族は、生活のメドを立てることが出来なくなってしまうです。私の願いは、きっと島の女たち皆の願いでもあると思います。巫女さま、どうか、男たちを私たちのもとに戻してください」

苦情は概してこのような内容であり、悔しそうな表情でなされる女たちの嘆願は、ほとんど毎日続いています。とくに、ここ四、五日は、一刻たりとも人の流れが途切れないほどの勢いです。



巫女の仕事の引継ぎのため、忙しい毎日を送っていたチェリアでしたが、それだけの嘆願を耳にしては、さすがに自身の腰をあげない訳にもいきません。とにかく島の現状を知る必要があります。

そのため、勇者アサジを伴って、島の様子を視てまわることから始まりましたが、そうやって自分の目で確かめると、島の異常性は、たしかに痛いほど明らかでした。

チェリアは、傍らのアサジに動揺を隠せない声で言いました。

「少し前までは、あんなにも熱心な働き手だったのですよ。なのに、それと同じ男たちが、今では秋の収穫作業まで投げだす始末です。ねえアサジさん、一体どうしたのでしょうか。やはり例の葉売りのせいなのでしょうか」

そう話しかけられたアサジの表情が曇ります。

「五日も前に、チェリアさまから葉売りたちを連れてくるよう命じられていたのに、未だに、彼らの居場所すら割り出せない私が悪いのです。何人もの部下を与えられましたのに、結局、手がかりの一つも見いだせないとは情けないかぎりです」

アサジの謝罪に、今度はチェリアのほうで狼狽してしまいます。

「そんな、違います。そんな風に自分を責めないでください。私がお願した時には、葉売りたちは既に姿を消していたのです。それは、私の最初の指示が遅かったということに他なりません。

ですから、落ち度は私のほうにこそあるのです。ああ、どうか頭など下げないでください。あなたにそんな事をされては、私はどうしていいか分からなくなってしまいます」

さらに歩いていった二人は、とうとうキンナラの店があったという海岸まで至りました。そこでアサジが苦々しげに呟きます。

「ご覧のとおり、残念ながら、今は店の残骸しかありません。老婆も、異国人の少年も、そして客であった男たちも消えてしまいました。それもあり大勢の人間が、忽然と。私にとっては、ほとんど信じられない思いです」

immagini



「ええ、そうですね……」

と答えたチェリアでしたが、そのとき彼女は、何かを思い出したように歩きだしました。

（そうよ、たしか、この近くにあったはず）

チェリアが進んでいったのは、キンナラの店があった場所から少し離れた、砂よりは小石のほうが多い海岸で、そこに、やたらと目立つ丸い岩が一つ転がっているのが、アサジの目にも確かめられました。その岩がなぜ目立つのか、それは風景に溶け込んでいないからです。まるで突如として投げ出されたかのような無造作さで、その岩は置かれています。

「変な岩ですね、チェリアさま。周りの小石は黒いのに、この岩だけは青みがかっています。表面だって変にツルツルしている。ほかに、こんな抱えるほどの大きさをもった岩などありませんし、何でしよう、この岩の違和感は」

「それは……この岩が特別なものだからです。それに、この岩は、以前に見たときには岩などではなかった。これは確かに石だったのです」

なぜか思いつめた目で岩を眺めるチェリアが、アサジにそう答えました。

「岩が石だった、とは、それはどういう意味ですか」

言いながらアサジがチェリアの顔を覗くと、その顔は蒼白になっていました。



「どうしました、チェリアさま！」

「空の種が……創世記に書いてあったことは、本当のことだったのね……」

そう独白すると、まるで力尽きたかのように、チェリアが倒れそうになりました。アサジが咄嗟に彼女を助けたが、チェリアは震える声で大丈夫だと言い、病人のような足取りで岩に近づいていきました。そうして忌まわしげに岩に触れながら、

「アサジさん、すぐに岩に戻ります。急ですみませんが、調べたいことがあるのです」と沈痛にも見える横顔でそう勇者に告げました。

岩に到着しても、チェリアの蒼白な顔は、一向に血の気を取り戻そうとはしません。

陰鬱な空気を漂わせた彼女は、アサジと別れて書物庫に直行すると、そこで迷うことなく一冊の書物を手にしました。表紙には『創世記』と書かれています。チェリアは震える手でその本を捲っていきました。

——始まりのとき、世界には天と地のほかには何もなく、地上には誰も住んでいなかった。地の表面は、天の底にじかに接しており、その狭間には、何者かがもぐりこむ隙間など全くなかったのである。神はある日、地上に生き物を住まわせることを決めた。その生き物は天上でこしらえた生物で、その体のなかに動物の性質と植物の性質、そして人間の性質を持っていた。

神は、生き物のために、地上に種をまいた。そうして種とともに、生き物を地上に降ろした。

生き物が種に手を触れると、その種から空が吹き出した。そして天の底は、この空によって、上空の彼方へと持ち上げられた。すなわち、空によって、天と地が遠く分かれたれ、その狭間に生物が暮らすべき空間が現れたのである。

img039(2).jpg



種に触れた生き物は、その瞬間に動物と植物、そして人間に分かれた。そうして地上の至るところに満ちて増えた。

これが世界と生き物たちの始まりである――

チェリアが独り言ちます。

「私たち人間は、天上の生き物の子孫であり、彼とともに地に蒔かれた種、空の種というのが、あの海岸に転がっていた丸い岩を指していることは、すでにお婆さまから教えられている。

空の種が、別名「オンパロス（ヘソ石）」と呼ばれ、その石のあることが、この孤島に「世界のヘソ」という名前を与える原因になったことも」

――オンパロス（ヘソ石、空の種）は、天と地上の生き物をつなぐヘソの緒である。

もし、地上に降ろされた生き物が、神に対して、親子の絆を断つようなことがあれば、そのときヘソの緒も断ち切られるだろう。その時オンパロスは、ただちに地上から、生物が生きるために必要な条件を取り上げてしまうことだろう。

ヘソの緒が切れば、胎児は死ぬのである――

神に対して、親子の絆を断つとは、要するに、親である神の意向に背くということでしょう。つまり天の理法から離れた悪事をしたならば、ということですよ。

――すなわち、そのときオンパロスは、かつて吹き出した空を、今度は吸い込み、地上から再び空を無くしてしまうことだろう。

それによって、天と地の狭間には――かつてそうであったように――何の空間もなくなり、地の表面は、天の底に直接触れ合うことになる。そうして始まりの状態に戻るのである――

この『創世記』の記述を覚えていたチェリアが、海岸でオンパロスを見たとき蒼白になったのは、さきに描写したとおりです。

ですが、それも仕方ないでしょう。以前に訪れたときには、オンパロスは、自分の膝ぐらいまでしかない「石」だったのに、それと同じものが、いまや、アサジの腰ほどの高さをもった「岩」になっていたのですから。

となれば、オンパロスが空を吸い込んでいることは、もはや火を見るよりも明らかでした。

「オンパロスが空を吸い込んでいるということは、つまり天の底が地上に近づいているということ。これが進行していけば、いつか私たちは、天の底の下敷きになる」

そう言うチェリアの顔は、まるで凍りついたように強張っています。

「それもこれも、デルフィーという薬に、魂を奪われた男たちのせい。その、天意から離れた墮落のせい。そして、このような事態を、未然に防げなかった私のせいなんだわ。

だってオンパロスがテピト・テアナにあるということは、この島で暮らしている人間の想念こそが、

もつともそれに影響を与えやすいということなのかも」

もしオンパロスが大きくなり続けたとしたら、それによって天の底に押しつぶされるのは、テピト・テアナの住人に限られたことではありません。

そうです。世界の空に境目などありはしないのですから、この島の空が完全に無くなったとすれば、その瞬間は、世界中の空がオンパロスに吸い込まれた瞬間でもありません。

これに気づいたチェリアは、それこそ全身を震わせて慄きました。

「もしそうになったら誰もが、本当に世界中の誰もが死んでしまう。一人残らず、天の底につぶされて死んでしまうんだわ」

チェリアは、どこかに逃げ出したい気持ちで一杯でした。

実際、まだ十四歳の「少女チェリア」とっては、自分の幼さ、幼さゆえの弱さ、脆さ、それだけが我が身の全てでした。しかし「巫女チェリア」には、どんな事をしてでも、島民たちを救わなければならない義務がありました。

「そう、巫女……私は島の巫女なんだわ。問題から目を逸らしてはいけない」

こう自分に言い聞かせて、チェリアは、とにかく、まず真っ先に自分がしなければならないことに、考えの絞ろうと思ひ努めました。

「何はさておき、葉売たちと、その客となった男たちを見つけ出すことだわ。」

いくら天の底が押し寄せてくるといっても、幸い、この広い世界中の空がオンパロスに吸い込まれるまでには、まだ相当の時間がかかるはず。

それまでの間に彼らを探しだし、会ってオンパロスのことを教えてあげればいい。このままだと自分自身も死ぬことになるのだと。彼らが自分たちの立場を知り、罪を認め、反省してくれば、きっとオンパロスはもとの大きさに戻ってくれるはずだわ」

（5）月神セレネの仁慈

勇者アサジ、およびその部下たちは、巫女の厳命を受け、翌日からさっそく精力的な探索活動を始めました。もちろんキンナラたちを探すのです。

しかし、目当ての葉売りたちは、短いあいだにも次々と居所を変えているらしく、その巧妙な逃亡術によって、アサジたちの探索を、何日たっても難渋させずにはおきませんでした。

その事実、もちろんチェリアのもとにも伝わっていきます。

（今日も彼らは見つからない。説得すべき相手が見つからないのでは、それから先へ話を進ませられないわ。いたずらにこちらの焦りが募るだけで）

こうした情けない現状にあるチェリアは、それでも何かの足しになるだろうと思って、書物庫で、何か意味のありそうな文章を探していました。

「もどかしいけれど、今のところ、これが私にできる精一杯のこと」

こう言っていて頑張っていたのですが、そうしているうち、書物庫の片隅から『月神セレネの仁慈』という本が見つかり、その本のなかで、チェリアは世にも恐ろしい事実を知ることになりました。その本には次のようなことが書かれていたのです。

——これは天上界における史実の一端である。

さきに空の種（オンパロス）を蒔いた大神に対し、月の女神であるセレネが尋ねられた。

「主よ、空の種がまかれた島にも、やがて人間が住むことになるでしょう」

その島人たちが、もし空を種に戻してしまうようなことを、そうした天意に反したことを行なったり、考え続けたならば、そのとき世界はどうなってしまうのでしょうか」

「そのときには、世界全体が天界の下敷きとなるだろう。そして、実際にそれはあり得ることだ」

そう言うことから、大神はさらに続けられた。

「実際、その島民たちは、ほかの何処よりも、空の種に影響を与えやすい場所に住んでいることになる。しかしながら、あまりにも種の傍近くにあるために、空が失われるとき、もっとも最後に被害を受けることになるのも、かの島の住民たちということになる」

たとえば、彼らが何らかの悪念を募らせたとしよう。愚か者は目先のものしか見えないので、遠い未来や広い世界に対して盲目になる。

未来と世界に盲目である彼らは、自分たちが置かれている立場を知らないまま悪念を抱き続けるだろう。そして彼らは、世界の大部分が滅びてから初めて、自分たちの悪念と悪行が、世界を滅ぼした原因だったことに気づくのである。

もちろん、その時には全てが手遅れだ。が、これこそ、もっともあり得る『滅亡の過程』であることだろう」

この大神の言葉に、月の女神セレネは涙を流された。

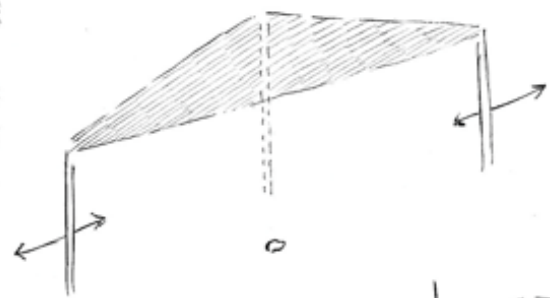
「それでは、かの島以外の場所に住んでいる人々がかわいそうです。ならば私は、世界に満ちみちた大部分の生き物たちを助けるために、かの島に『三本の柱』を立てましょう」

「柱とな」

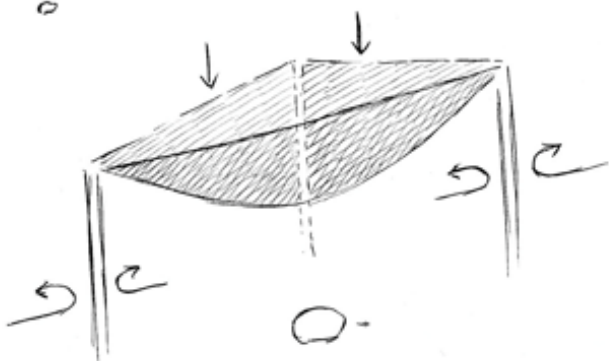
「はい、世界全体ではなく、かの島に住んでいる者たちの、局地的な悪念によって、天の底が地上に近づいてきた場合のためにです。その際には、三本の柱を結んでつくる『三枚の壁』が、その壁の内側と外側の空を分け隔ててくれるのです」

「ということとは、かの島に与えられた空は、そのとき、三辺の壁の内側にある、ほんの僅かな量になるということか。」

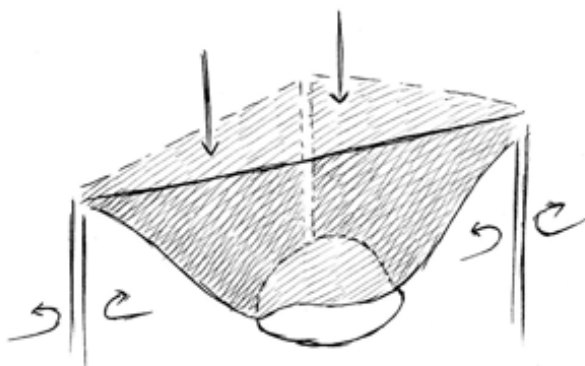
だが、島上にある種が空を吸い込んでいるというのに、隔たれた外側からは空が流れてこないというのでは……島の空は、すぐさま無くなってしまいうだろう。違うか、のうセレネよ」



මහලයා! මහලයා!
 මහලයා! මහලයා!
 මහලයා! මහලයා!
 මහලයා! මහලයා!



මහලයා! මහලයා!
 මහලයා! මහලයා!
 මහලයා! මහලයා!
 මහලයා! මහලයා!



「それでいいのです。さらに『三本の柱』や『三枚の壁』が天の底を支えるので、壁に囲まれた三角の内側のみが、天の底が接触したときの脅威に晒されることになります。」

これによって島の地面に達した天の底が、空の種自体を包み込んでしまうので、それ以上には、種は空を吸い込んでいきません」

この処置によって「かの島の民の悪念によって、世界全体がいつのまにか滅びてしまう」という事はなくなる。月の女神セレネが企図したのは、そのようなことだった――

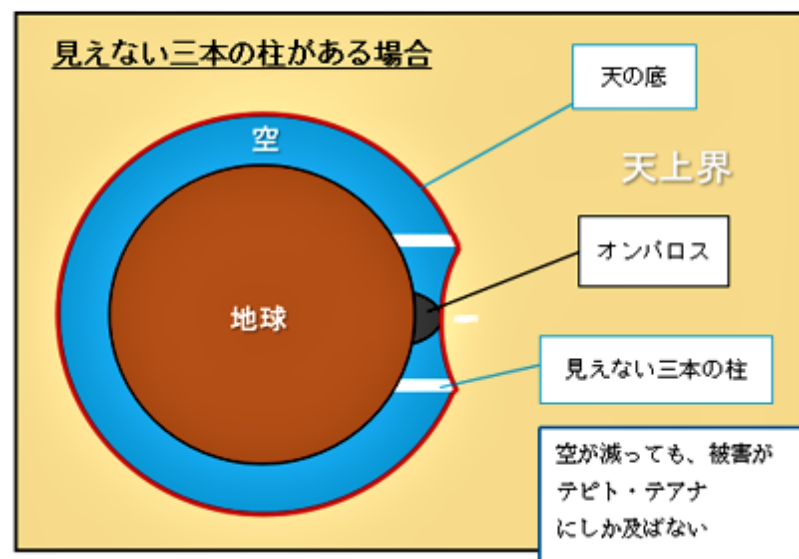
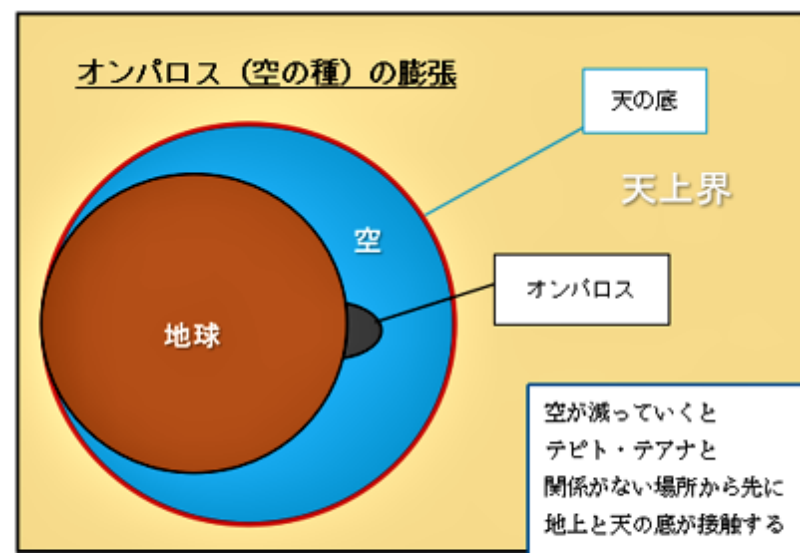
読み終えて、チェリアはゴクリと生唾を呑み込みました。

「空の種がまかれた島というのは、疑いようもなく、このテピト・テアナのことを指しているのだし、三本の柱というのは、私自身も見ることがある、沖合のあの『見えない三本の柱』のことに違いない。だとしたら……」

だとしたら、月神セレネが、世界全体の保全を優先させたことによって、今回の事件は、まさに島の民だけにのしかかる重荷となってしまったのです。

つまりオンパロスに吸い込まれる空の量が減った分だけ、デルフィー中毒者たちの心境が変わらなかった場合、天の底が地上に接触するまでの時間までもが、大幅に縮まってしまったのです。

2023.04.15 (4) .png



ということは、チェリアが中毒者たちを説得し終えるまえに、天の底が地表に達してしまう、それによって島民が全滅してしまう、ということも「現実として充分にあり得ること」になってしまいました。とはいえ『月神セレネの仁慈』の次のくだりは、島の未来のこと以上に、チェリアの胸を締めつけずにはおきませんでした。

——かの島民を犠牲にすることで、月の女神セレネは、世界という大きな範囲の安全を確保することに成功した。

しかし彼女は『三本の柱』を立てた時点で、どうしても心残りのことがあるのに煩悶した。ほかでもない、空の種がまかれた島に住む者たちの、予想される、あまりに哀れな死についてである。

「私のせいで、彼らだけが、ずいぶんと『死にやすい』立場に置かれてしまった」

そこで月の女神セレネは、かの島の民たちに補償的な仁慈を与えることにした。

「結局のところ、島の人々に大きな悪念さえ生じなければ、天の底が急に落ちてくるようなこともないはず。

ならば、万が一にもそんな事が起こらないよう、まず島に、滅多なことでは破られない『魔への強い結界』を張ることにしよう。

そしてその上で、島の人々を天意に叶うような心境に導く者として、そこに私の力を分け与えた者を遣わせることにしよう。その者は女性で、きっと巫女と呼ばれることになる」

こうして、月の女神セレネの仁慈によって島の巫女が生まれた。巫女が、女神の慈しみとして在ることが、ここに宣言されたのである——

「だとしたら……もし島人たちを助けられなかったとしたら、彼らを死なせたのは、私であるも同然なんだわ。だって、私は巫女なのだもの。巫女の実存意義は、まさしくオンパロスを平常に保つことにあるのだもの。

どうにかしなくちゃ。それがどんなに難しいことだとしても、巫女である私がどうにかしなくちゃならないんだわ」

とはいえ、オンパロスの様子から逆算すると、残された時間は、あと半年あるかないかというところですよ。しかも、薬売りやその客たちに、説得、反省、更生、という過程を踏ませるまでには、相当長い時間がかかりそうでした。

それらを考え合わせますと、たった今、島の滅亡を止めることを誓ったチェリアでさえ、

「島が、天の底に押しつぶされる可能性は、高い」

とそう言わなければなりませんでした。

「そうならないように努力はする。けれど、もしもの時のために、どうしても時間を作っておきたい。薬売りたちの探索にさえ迷走している現状を顧みるならば、まずは時間の猶予を生み出すことが先決だと思っから」

こうした思いで、読みかけの本に目を戻すと、少し読み進んだところに、どこか神秘的な雰囲気をはなつ何者かの名前が現れました。

「アトラス……天の底を支える者？」

しかし、身を入れて読むには、どうも紙面の文字を追いきい感じがします。ふと窓のほうを見ると、もう日が暮れかけていることが分かり、チェリアは、傍らにあった油皿に仄かな火をともしました。

その夜、チェリアは勇者アサジのもとに使いを送り、ただちに砦に来るよう、その旨を伝えさせました。婚約を交わした二人ではありませんが、結婚前なので、まだ一緒には暮らしておりません。

召喚をうけたアサジは、今も生活を共にしているバッテリーヤの家から砦に向かいました。

（よほどの大事らしいな）

そう思いながら巫女チェリアの前に辿り着くと、目の前にいる彼女が、なにか深い悲しみに耐えているような顔をしているのが見て取れました。

かくしてチェリアの口が開かれます。

「アサジさん、部下の方たちと共に、明日ただちに船を出航させてください。そして、その船で北の大陸を目指してほしいのです」

「は？」

アサジは自分の耳を疑いました。

あまりに出し抜けですし、巫女が言う「北の大陸」というのが、伝説の大陸としては知られているものの、それが実際に存在しているかは不明であったからです。

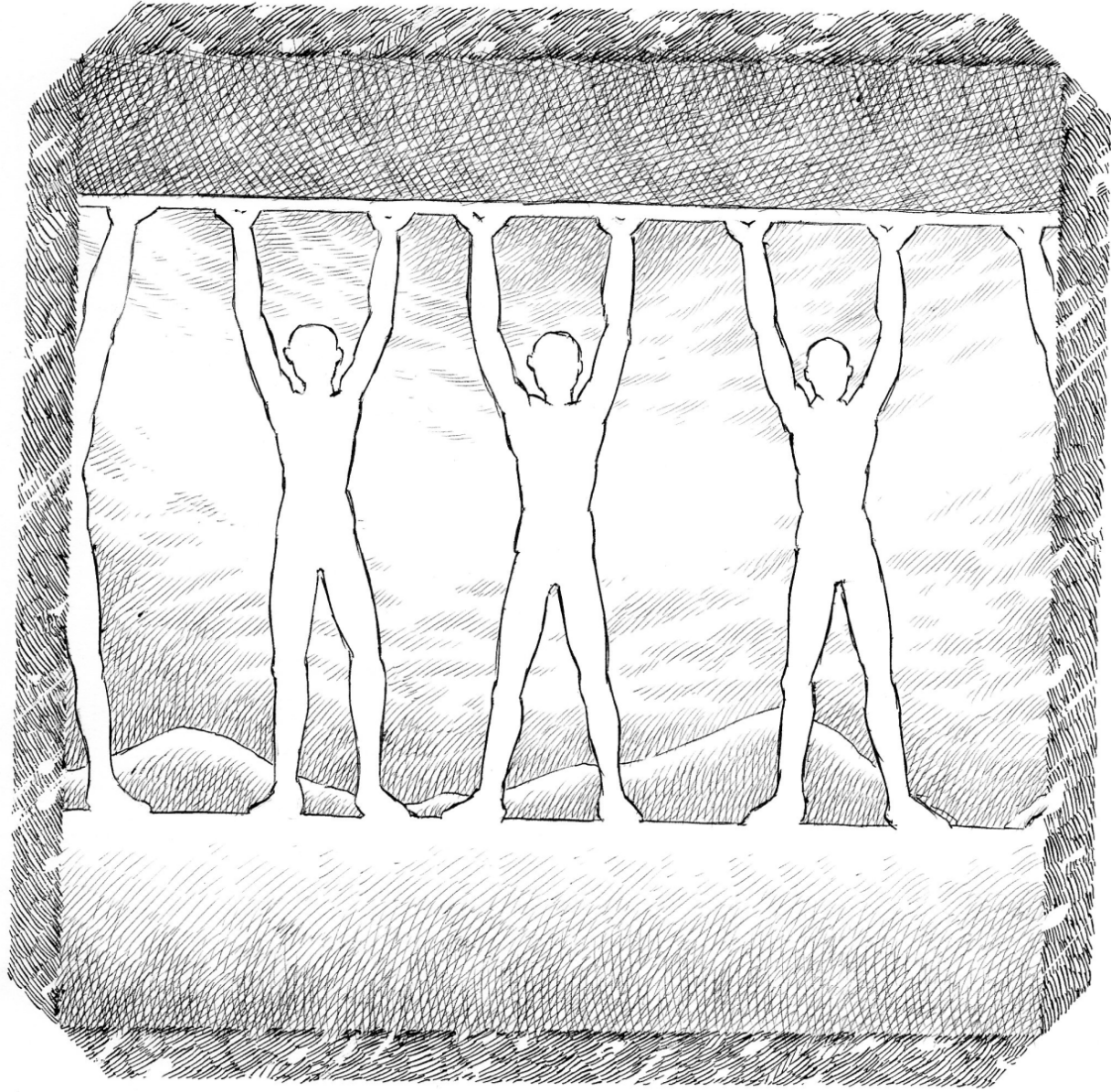
しかし、チェリアの表情はあくまでも真剣そのものでした。

「勇者のあなたにしか頼めないことです。どうか、北の大陸に行って、アトラスたちを連れて来てほしいのです」

「アトラス？」

チェリアは、オンパロスと空の関係、押し寄せてくる天の底の脅威、そして切迫した島の現状について語りました。そして、今は問題解決よりも、その問題を解決させるための時間を確保することのほうが必要であるということも。

img041.jpg

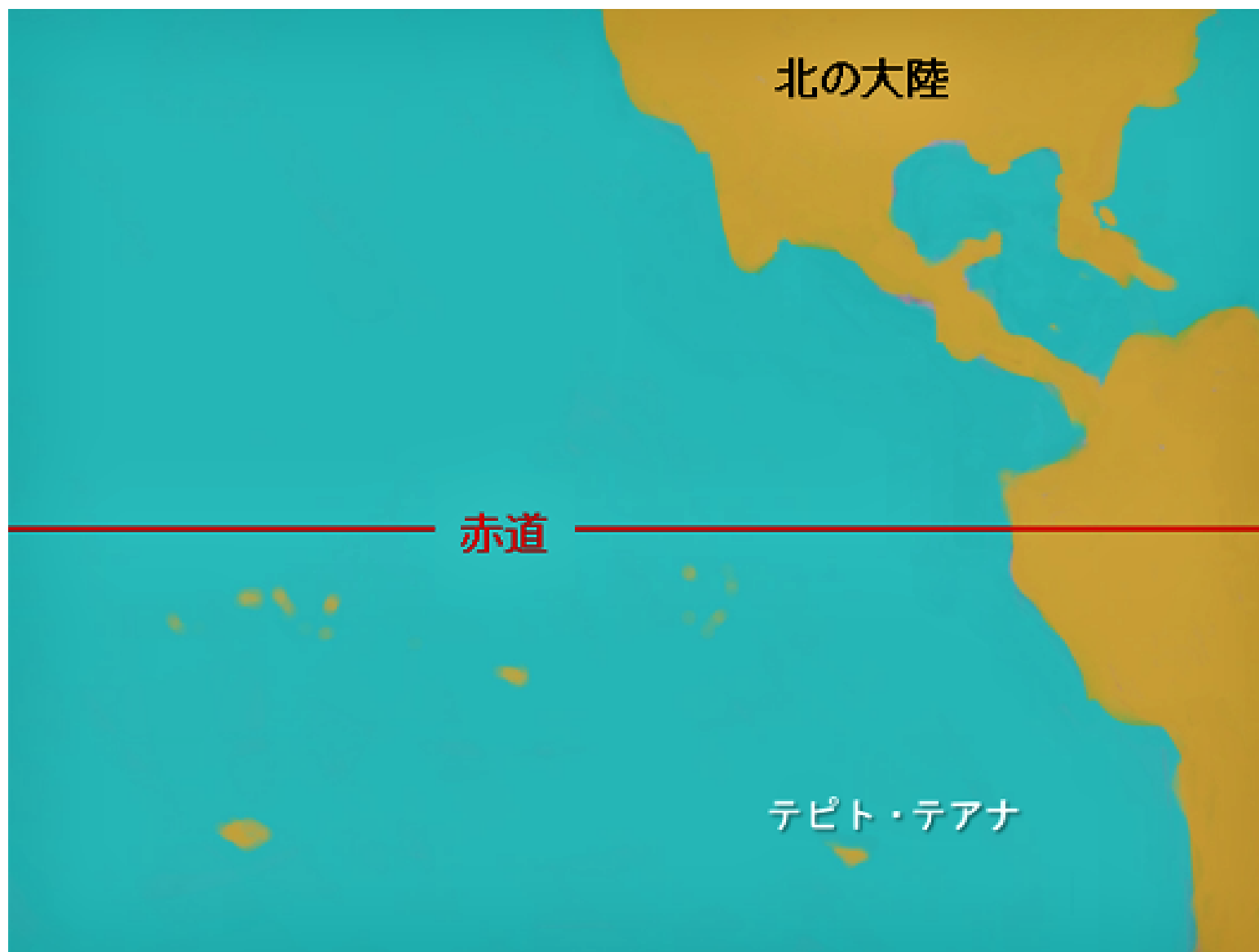


「アトラスというのは、私たちでは想像もつかないほど大きな人間、つまり巨人といわれる人たちのことです。彼らは、世界の各地で天の底を支えているようで、北の大陸にも、その一部がおられるということなのです」

「天の底を支えるというのは？」

「ええ、天の底の高さというのは一定していません、アトラスたちが支柱にならないと、人間たちの生活に支障をきたす地域があるらしいのです。」

ですから、きっと北の大陸にもそういう場所があるのでしょう。ともかく、彼らが天の底を支える巨人であることは間違いありません」



「つまり……そのアトラスたちを連れてきて、島の上にある天の底を支えてもらおうというのですね」
チェリアが頷き、アサジにその真意を伝えました。

「たとえ天の底が地上に近づいたとしても、アトラスたちがそれを持ち上げてくれれば、見えない柱によって作られる三角形の内側に、まわりの『空』が無理やり流れ込んでくると思うのです。もちろん一時的な処置でしかありませんが、それできつと急場はしのげると思います」

懸命に平静を装っていましたが、チェリアの声は明らかに震えていました。自分がどんなに酷いことをアサジに告げているかが分かっているからです。命をも落としかねない、それほどにも危険な使命を果たせと、いま最愛の人に命じているのです。まさに断腸の思いでした。

「島の巫女として命じます、船で北の大陸に行き、アトラスを連れてきてください。そしてアサジさんは、この危険な使命を果たして、どうか、どうか無事に帰って来てください」

アサジの瞳を見つめ、半分涙声になりながら、それでも念を押すように言ったこの言葉は、チェリアにしてみれば、本当に、心臓に杭を打ち込まれるような思いで口にしたものでした。

（アサジさんが断ったとしても、私は彼を責めることはできない）

しかし、すべての事情を知り、チェリアの苦悩を目にしたアサジには、もはや躊躇いも迷いもありません。あるのは自らの命を捨てんとする覚悟だけでした。

「巫女のお言葉どおりに」

そう頭を下げると、アサジはその日のうちに、すぐさま航海の準備に取りかかりました。夜が明けると部下たちにも命令が伝わり、その翌日には早くも出発のときを迎えることが出来ました。

「では、きつと帰ります」

と、島を救う勇者を乗せた船は、チェリアとバットーヤに見送られながら、美しく晴れた初冬の空のもと、水平線のかなたにゆっくりと消えていきました。

アトラスⅡ

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
